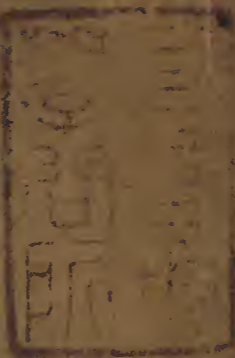


# 河海抄

一之二

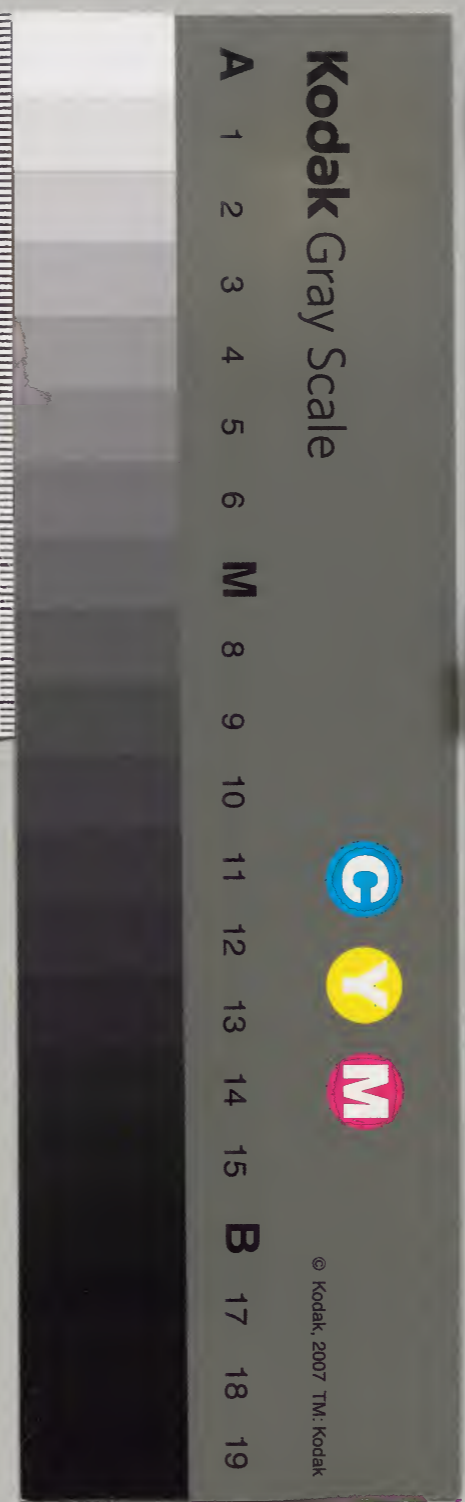


22

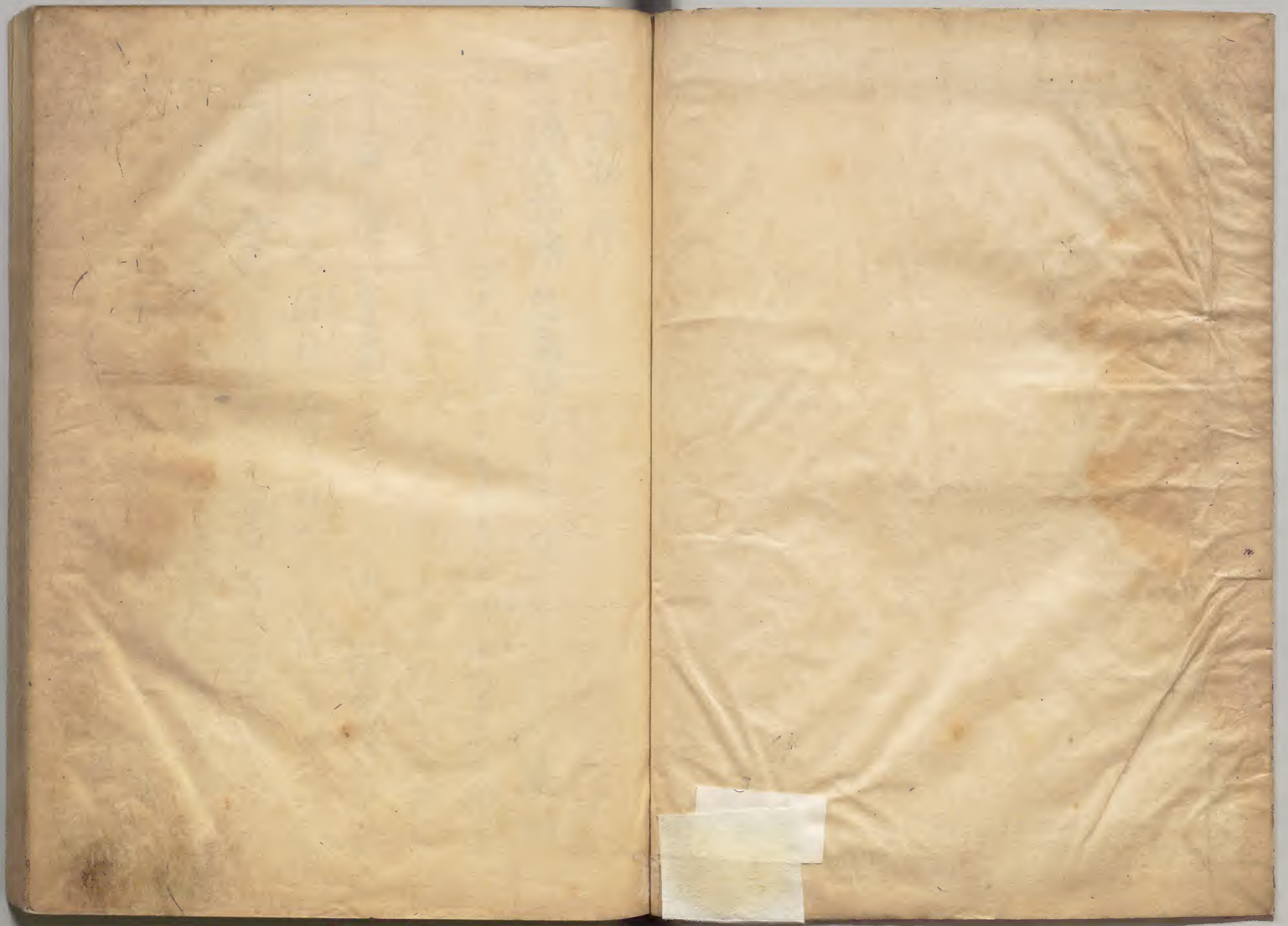
|   |   |   |   |
|---|---|---|---|
| 庫 | 文 | 閣 | 内 |
| 函 | 架 | 冊 | 號 |
| 二 | 〇 | 一 | 九 |
| 二 | 〇 | 一 | 九 |

|      |          |
|------|----------|
| 内閣文庫 |          |
| 番號   | 和 17691  |
| 冊數   | 10 ( 1 ) |
| 函號   | 203 22   |

203-22



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり  
綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり



河海抄序

光原氏物語を寛弘のころふりてさうく康和

のころよりさうくさうくさうくさうくさうく

いふよりさうくさうくさうくさうくさうく

いふよりさうくさうくさうくさうくさうく

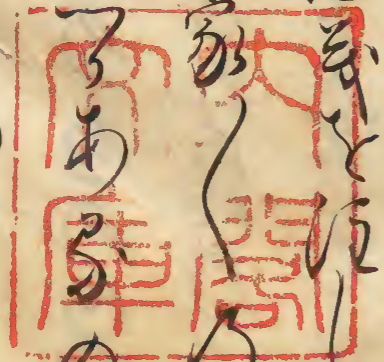
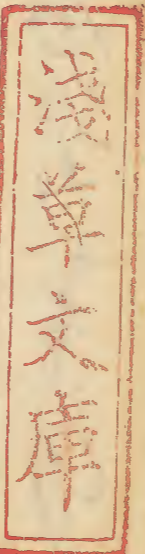
いふよりさうくさうくさうくさうくさうく

いふよりさうくさうくさうくさうくさうく

いふよりさうくさうくさうくさうくさうく

いふよりさうくさうくさうくさうくさうく

いふよりさうくさうくさうくさうくさうく



のうゝめは梨壺此奇はまにりせく一万葉集

和書云人大中臣能宣清系元輔源氏紀取文政上望城

とよこしやしり土め例とられきふくや思

天曆時於梨壺訓萬葉選後選依之今又於和書今海源氏

戸の人救と定く共十枝成消きくあやあ

アゝに先師忠守朝臣七ワ此海の座のんを

きんめくぬるこの襦小恋をくうのちたりよ

頤回小あつりくこくく物況と奏

きよふなるゆー井ふわじとむとのとくと

うきくくはんに惟光良清の流成きよよや

ーき翁あると極とむる道とすあひくじ

こくし推くくこのをとりとくひめかり

くろまきくきり此神の多れきくぬあけき

とまきくじくこの争れあやにきくじく

成あひいんとこの故小中葉乃林ふあきい

くふくくゆうちふとくうら前修の海とを

てうくこあさたとさくじくつくいとこのね

れ人きまぬとれ葉成をのひくくはに軒を

の萩のあにさすくまうとせりあつあく二

十まをん各所きく何海抄とりよなを

まよの重としのひと枝のち成あつさくまを

あさく見察スウナクきくあさありとくひと

とも故と温くあつて〜きんぎふぶらり  
とせじふふらり〜是とちりり〜とらり

河海抄卷第一 正六位上物諾博士源惟良撰

料簡

一此物治の起ふ詔々ありしと久も西宮九大臣、  
安和二年左宰相権帥よた遷りてまねて  
藤式部にさあぐよるしあれそまらりてさひ  
かきく比大齋院選子内親王より上東門院女十玄  
うらうらふ物原のまゝに作し留りてせ給まらり  
ら不行りりやれ右物治いあられ多れば  
あつて〜くはらりて〜まらり〜  
〜或るふらりせられれハ石と守り通れ

とくこれ事と祈りきるにむと云も八月末  
初月朔水ふりりふられとていふるま  
物治の風信やふりいづるをわとれぬら  
ふとて佛前りあるときふら般若抄書と  
本尊ふりうけてすらとて明石のあまを  
とてあまりいぬみきよなるとて治のあまを  
ふらかりりたりとていふとていふとて  
ふら障楨梅のたふ般若抄書とていふ  
ゆりりきりり奉納しきりりには寺に  
つとていふとていふとていふとていふ

或るかふとて周の因白居易にいふとて  
久在細言菩薩相のたふとていふとて  
ふら—其後改書よ書くふらとていふ  
てとていふとてとてとてとてとてとて  
せらりりりりりりりりりりりりりり  
開白奥書とていふとていふとていふ  
のこもてとてとてとてとてとてとて  
た交にふの道ぬふらとてとてとてとて  
まてとてとてとてとてとてとてとて  
子毛羽に云富房富らとてとてとてとてとて

此類を——部のうらふに案上げ申すとどうして記  
しる故小藤或乎此名成りてとて記して紫或乎と号  
せし事くらわ一説云藤或乎の名出云々といふ事  
のら小藤の花乃多れ申りて紫其字成り  
記すもあらふと云後物語一説云一系院の御  
女と子の名也上東の院へ入りてとて  
我申りのおるにあふれと思言せとりさせぬ  
小なるといふ名ありて武藏のくもやともなり武  
又作者記音此化也中山四書抄水後云之紫武部  
源氏物語つくりありて傳はるるに凡まれ取

とハありしゆらに日本記と初とて法成乃  
日記小いふ事ましくありてとていふ事ありし  
人云日本記局と号しゆらとありとあり大方廣の  
中其人のありしゆらとていふ事ましくあり  
とていふ男女よつとていふ事ましくあり  
とていふ事ましくありとていふ事ましくあり

一物語の時代の醍醐朱雀院三代は唯らるる  
桐壺御門は延長朱雀院天慶冷泉院天曆  
光原氏ハ西交た大長如此相當とあり也桐壺奏  
一寂初よとありとていふ事ましくあり

御事浅載より是御先皇遺誠儀也昔比明々此西人を御

のくせあつるとも是花しとくせをあぬく又こまうと御

まのうらふうらんという多れ西門の所いますしあれをいふと又給命を

小朱雀院の所と延表の所てつくとれらうと

せあつつふ又我の世れ事ともとくくせあつつととり

又照宣られ母の寛平は皇女延表帝の妹也

影中將致仕たたの母も相壺御門の一所取ありけ

外もとし記たり一節者云い前の准極すととし

と有としともいけ御治ハ光原氏浅じのとと

ふれされいおまたた小准とふと一世乃源

氏た遷乃治ハ相同々れも及ち好多れえ

達といふてきくとらりやいれ御治ハとい

けらといふとくくるる若く作御治のらく

い大総ハといれたとけあれと新治ととい

あれらふといふれと換ふとあらはく

朝乃書簡春秋史記といふ矣張ふもサレの

矣曰ハありえ仍相壺帝冷泉院と延表天曆小

からくくといふとらりあらはく唐と云ふ矣れといた

りといふ或ハ秦の始をれられる例といふ

せり又天慶所門ハ相續の皇胤たりといふ

といけ御治ハ小朱雀院の所子今上冷泉院の

といけ御治ハ小朱雀院の所子今上冷泉院の



以後等或説云は系有作多 光源氏をともむの九相

小治ととりともいふれは二道れを違るるゆへ

り在中将の風とすものひくも系二系伝伝

も女院殿月車高侍ふもく或はふれは少将の

そよりともいふり又た上天皇れ尊号も漢家よ

とたられ憲憲躅躅本朝よの草履皇太子の先派と

搭らるれは物治乃御也初よりまじり御時

ふりともいふ分明分明も書あはれはいもい破なり

よりあはれはよの延長の所付といふは合り

いふ或桓本一条院と桐葉印口は准一又光大

臣伊園とと光源氏小槻らふとらよ一葉もあはれ

以ん謀説し若桓本といふは後乃帝一と湯

成守多延長の所名お治ふあり一條院の延長

より及ふ代のみみはとらうのうへ順麻呂とこれ

ころと年にとあはる千枝つひれとあり西人兼

崔村と御代れ盡工あり既よこのころとあり一条

院まてなせせれ又給合ふ兼崔院と當代の

り載之は異論平

或説云は物治とハ光源氏物よりと号する

いふ一源氏とら物治あまのころ中一ふ光源

氏物語ハ系式アリ初巻作也是今業紙迄傳  
者系式部寛弘六年日記小源氏物語の正前  
あり成りし世にありと水鏡ふも系式乎源氏  
物語とより代々集りて是なり  
柞木院中一振ありしなり成歸自筆也  
と志今世に傳りしと源光のハ中とて授  
合れ稱して家の中とせり所謂二条陳子房  
中冷泉院中細言朝院中若川丸太長後房中  
号善長卿  
丸太長書法 従一位勳廉子中 号善長卿  
丸太長書法 法性寺開白  
中 唐子小字子  
号善長卿 且系三位後成歸中京極中細云

定家中 号善長卿 也名清澄中皆有異同程勅合  
古中且可加る見老耶善有從之古人之善  
言也 家之不出也也加光行本也

一 系式乎者鷹司及 後一位倫子系  
丸太長雅信也 官也也相繼而清信  
上東門院父越後守為時母常陸介為信也其  
祖先者因院丸太長 次曰舍人良乃右中將  
利基中納言為輔因信守雅正為時也後  
丸太長權依宣孝嫁之 大貳三位并府  
校名也  
生と憲 同イ 院ハ正親町ハ南京極西類今東  
院向也院ハ上東門院所為也式了墓所在

空林院白毫院南小野望暮乃西く空林院  
日記も荒野空林院ありり〜み〜わ空林院  
淳和離交也員本末まよえ源氏空林院あり  
六十年とよみとせ〜き〜一也或るを  
檀那贈僧正の許可とあて天台一心之親の  
血脈よ入まり〜ゆ〜らしは荒野空林院の幽深  
と思ふりりも秀ゆありや  
一申古れ先達の中よは物治の心とありは極く  
〜と詞とありは〜と〜と〜と〜と  
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

續拾遺集

権中細言後忠

あつめは家々を〜と〜と〜と〜と〜と  
と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

典侍親子朝臣  
ナイヒラズケ

あつめは〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
浮舟の君小野あり〜と〜と〜と〜と〜と  
のありはあり〜と〜と〜と〜と〜と  
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

新古今集

あを改ち長

白雲のまきけとさくらをれりみり夕日のむ

續古今集

右上天皇

板原磯流

神のまやれぬらん橘のま〜川にせ〜うまは舟

小侍迄

うらと子すま〜今よ〜ひ〜る〜る〜る〜る〜る〜る

先後朝臣

いびゆ〜せぬとま〜入〜く本は涼〜一三中川の宿

鷹司院師

あ〜〜浪の音もか〜り〜ん浦もときをれ器の松風

足赤いみふ〜残〜る〜る〜る〜る〜る〜る新古今よ

虫の音もあ〜る〜る〜る〜る〜る〜るのまよやそ

ゆ〜れぬ〜る〜る〜る〜る〜る〜るの月れゆ〜る〜る〜る

續古今ふるれよあふ〜る〜る〜る〜る〜る〜る

〜い勝斗〜る〜る〜る〜る〜る〜るのたつぬ

るよあ〜る〜る〜る〜る〜る〜るの奇と〜る〜る〜る

代集ふあ〜る〜る〜る〜る〜る〜るの奇と〜る〜る〜る

た〜る〜る〜る〜る〜る〜るの百番判詞ふ〜る〜る〜る

ゆ〜る〜る〜る〜る〜る〜るの遠根のま〜る〜る〜る

ゆ〜る〜る〜る〜る〜る〜るの源氏と〜る〜る〜る

ふ〜る〜る〜る〜る〜る〜るの事〜る〜る〜る

奥遠うろとのり

光源氏物語第一 相意

相意ハ淋景会也ハ取曹司ころいりて光源  
氏の母御息下相意更衣とのり仍考名とせ  
ア一各意前裁 初ハ所前の所かせんといのさ  
アなりとあり奥入く或ははき分奥陽有相  
意く前裁名と云は謬説ハ只一卷二各也相  
意者正説意前裁者其説也

○いつまの所時あり 延喜乃御時といふんと  
かめたころ也河原院とあふくハ院勅馬也

と云ふのあふく一寺といふく一伊勢集始り

いつまの所時ありあるとせん大なるとあふく  
あふくありと云は是亦例歟 陽とていつく

ともわくじとくむる一日日記以下乃讀  
拓一説にかじき方説也

○女御更衣ミメノカ  
カあまきこころしひけりるる小

延喜御時名妃ありて此中一更衣園子乃  
所服延喜二十二年十二月二十八日賜姓高名の御子源氏姓と給たまひ也

醍醐天皇後云事

朱雀打上母后皇右名云藤原朝臣穩子老政下中云藤原穩子スサノ  
日命  
經三位

妃為子門親王 光孝天皇之女 贈從一位

同正五位下藤原朝臣仁善子 仁善子 藤原朝臣 仁善子 藤原朝臣

同和香子 右方之定國女

更衣源氏刺子

藤原辨子 伴子 伴連永女 代明親王母

源園子

滋野幸子

月清子

年亮子

同采子

女房三位源氏長和子 月皇女 兼香女

月能子 元更衣 月人女

月姬子 香河菅根女 皇明親王母

滿子女王

月津姬 源日明朝臣母

同子子

源采子

月後子

源暖子

同園子 皇太后高明母 在大井原唱女

仲野親王女 亮明親王母

中仙言意情 章明親王母

參議侍衡女 源乃明母

桐葉帝後女

傳雲女 亮明親王母 亮明親王母

兼香殿女 四女母

女卿 亮明親王母 亮明親王母

後凉殿更衣

女御事

雄略天皇七年來 日本元 推媛 右備上達造 為女卿是女御也

大綱云源采女 皇明親王母

右兵衛督教相女 源乃明母

弘微殿右后 系左后下女 兼香院母

兼香殿女 源乃明母

相葉更衣 贈從三位 梅宗之卿女

前尚侍 貫高女 出女

女御事

女御事

女御事

女御事

漢朝の八十一女御あり周礼後漢書あり

周礼曰女御叙於之燕ハ後ハ歲ハ賦ス功ツ又曰王者妃百七

人后一人夫人三人嬪九人世婦七七人女御八十一人三人坐

鄭玄曰夫人如三台從容論礼九嬪堂教四德九嬪比九

婦教四德の嬪堂學之法ハ教九御之德謂婦德婦

容婦言婦切之七七世婦主知喪祭賓客婦

服之明其能服事於人比七七丈夫後漢書曰以備内職

八十一女御席于王之燕寢謂進御也比八十一之云

皇代記曰桓武天皇女御從三位攝三井子從四位下入鹿女

### 更衣衣

仁明天皇養和三年正五位上紀朝臣ヲトコ身被授

從四位下為更衣拍原天皇是為更衣物更衣之

漢書孝章曰更衣者便殿也巴園中在而慢有便

殿寢者陵上正殿便殿者寢側ハタ之別殿更衣也

注曰時中待帝權 主衣堂

葉之更衣ハ便殿之主上御衣トシ著之久法可也

故多更衣久又寢側乃別殿ウケ乃女子更衣法也

息ハ心トもハ福ト多ク是ハ体息ノ儀ニ多ク源抄ノ

之更衣のち小御是ハ心トもハ福ト多ク是ハ体息ノ儀ニ多ク源抄ノ

と云然レ但何トも同事也ハ女御多クと云

つららちぢもあり

史記曰是日武帝記更衣子史侍尚衣軒中得幸  
上暹羅坐騷基平陽主金十斤王固表子史奉送  
入文子史上車尚主衣車中得幸也 漢書注曰時於軒中  
侍帝權主衣裳

業之車中ありて后妃衣成脱て唐也此服成  
着して考らる取小号更衣也平朝更衣  
四位此相當也

上歸要抄云更衣事 尚侍道下諸司独着

禁多々々々

いと何人とるさうさふいあらぬ

云い事こ 又云停事之花客云い万葉系カス

とらいて時めに行ありけり紹妙日記

時トキ同クくいふみつらるそのいこ生成もを海先

くといあり又人がく去りくるももそり

めいまりーさらのよ曉同覽草万葉奥入水源

抄お裁之不審 安未之け義別事也詩よ冷

眼と作けんやいとととと海ーくみふん也

そのころろ極多るん也

いとーめろのころ乃船人也



ふとありーくありけり

後漢書曰生男如狼行思其狂生男如鼠用思其  
本侍家諸尊神切既畢 カミコトナヘタミイテ 靈運當遷

目下記あり。 定家卿説云あやうに父也 目下記のこ  
先代曰夏本記四字ラミイナツカリシキト點オリヌ方或延或曰支雅弱日延順和名  
とくハ病るよの事也大都ハ同ハレ

○うじくありわうる人 上達部殿上人こ

○あひるうり成そんめり 云愛

史記曰時人見邳都側目号ス蒼鷹

莊子注曰桀討何得守斯位而放其母使天

下側目哉 ソクメ 才十眩筵

京師長更為是側目 味密君王得見面已被揚妃遙側目 樂府上湯人 長恨の傳 陳鳴

○とろろーあもく心よのたろり 一説端

殿の討ハ姐己と愛ー目ハ幽王ハ廢后と寵

高天下成礼ハ唐ノ玄宗の楊貴妃よ

うろ中々其例ハ

○あめれーこ御宇 リキ 御宇 御宇 宇内日

天下日 御宇 天下日 卒ハ 目礼 天表 狂山

○あらしきさう 云為 史記高記白文 集 右詠拾送老子經 云道 昇記

云杯日 云事 狂山 何頃日 云情 日 云端 答打式 解脫上人

○いとろーたあさこと云半 伊勢物語 志者印 日物 乃注

云々一たる一とハたるぬともあたるもの  
不足よあつめ成るたるると云々

○御心々のたらしめられたるものごとくしるし行

云々又云景日 云々類日 史系日 日記

○ちこれ大納言

天武天皇元年改以史大夫藤我果安臣巨坊  
比登臣紀大人等已上三人始任大納言天  
長元年三月八月夏野始任權大納言異  
朝上古少師少傅少保是云三疏みくみく云々  
三云之貳之即之故云亞相漢以美之有亞相之号史大夫有取而御史之兼相

職相當今之彈正具義系承差次梅酒天皇此  
字暫改大納言為御史大夫是故大納言唐  
名稱史大夫不計意式者也

今日正真四人五當任官 寬平為正二人控一  
人其後權官加增高倉院御宇為十人

○羽云々云々のことあじわひつれ人のりりあつて

後漢書云陽平博旋為德陰以不專為德下  
男南也ハ小向又任る者謂也法陽よつと  
とる故是仍其賤若よ事室と小向と是つと  
是也后妃と拂房と号つたり也小向り位

あふ敬せき

○世のむかしとあやうきありカキ聲ハカ華ハカ 白氏文集

○まともりあやうユラユラ柳ユラユラ 入ユラユラ類ユラユラ

○さくの世ふもゆめあやうきいとしきよらるる

あはれといふいふあやうきとては法ハコ鏡カガミあはれ世もささけ

ひらけり

○さうりコト法コト也

伊勢物語云いとしきよらるるさうりさうり此人のきぬこ

○たゞ此わのこいんこ毛詩ハカ曰ハカ生ハカ高ハカ一ハカ末ハカ其ハカ人ハカ如ハカ王ハカ

入ハカ日ハカ有ハカ女ハカ如ハカ王ハカ 徳如玉等白徳如 河陽花ハカ作ハカ贈ハカ

宿浦玉為人ホノミ玉人としもホノミ應ホノミ衣ホノミ美ホノミの詞也

○あつはりれあつはりあつはりといふと君もささけい

あつはり 鶴草不直目合尊 あつはりいささけい

あつはり 豊玉姫 あつはりの人いささけい

あつはりいささけいあつはりいささけい

あつはりいささけいあつはりいささけい

あつはりいささけいあつはりいささけい

あつはりいささけいあつはりいささけい

○あつはりいささけいあつはりいささけい

老子徳経曰注お滋勸 盜賤多ハカ有ハカ也ハカ

注目法取 孫好勸 滋生

執着則農多廢飢寒  
並至故盜賊多ク有也

梅豆邏 リ布記 奇物

み珠愛

ミルキ 珠奇 任仙屋 非帯 トワラシク

神功皇后三韓とたゞしあはれむとせしむ

松浦河よりしりし意とらるる物を行

て魚とつてせぬと鮎釣よりれり多しは後志

くわるとおれせられりりりりりりりりりり

也松浦とい梅豆邏とあはれりりりりりりりり

の川とあふとらるる

長今東南水 扶記抄 或云驚馬新 漢後抄

りりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

伊勢物語云けし門のうららりりりりりりりりりり

○右大臣の女御はとせとく 壽重 縁 リ布記

懿徳天皇二年三月申ニクス食田改ニラチキニ矣出雲色余イロノニミト

為大臣 見高事記 山宗神天皇女三年秋八月丙申

綱丁巳大臣大新カハソ河命カハソ而改大臣号曰大連 曰

景行天皇御宇初以臣内宿祢為棟梁臣

成勢天皇三年正月癸酉朔己卯孝之天皇後或傳四年子臣内宿祢改

之大臣

仲哀朝又大臣氏持号大連大臣大連相並改

事百王極天皇四年乙始置大臣止大連

孝德天皇大化元年六月以何信念橋凡為凡左

臣以獲我山田石川磨為右大臣以大臣為大歲冠中臣

皇子連為河左大臣右大臣謂之三公異朝

三公皆別闕官為神傳保職棟梁于諸宮位梅

干帝道者師道而教習之師傳以義而紀之傳保於道謂之保秦漢以來有相

國凡大兼相之号已知唐政異于古之三公也三

台者象天之三台也三槐者周世外朝植之槐

三云羽列其下槐者壞之壞遠人之義也我朝

天孫天降於時天兒屋根命中臣天孫王命下

奇部奇部奉天照天神勅為凡右之杖習者如今之凡

右相欽神武天皇東征之後天下一統二神之孫

天種子命天賜命又為凡右上古之号凡喚

執政人稱食國政申大夫以上親房之記

○まうきのみきるん 儲君 儲皇

○まうきのみきるん 儲君 儲皇

○まうきのみきるん 儲君 儲皇

○まうきのみきるん 儲君 儲皇

○まうきのみきるん 儲君 儲皇

○まうきのみきるん 儲君 儲皇

○まうきのみきるん 儲君 儲皇

○まうきのみきるん 儲君 儲皇

のゆいゝえんたるをまつこのあいのちり物  
 有りしよりいふとあるとされは仕え  
 父の遺命をど意のうとさこえそは成  
 いし家ふまつし—あるをさうふあぬ  
 とそり一往ハ不審あつあられも再三  
 とみるふ次のしとあからふはしうす  
 ちさせぬ—福よのつらうさこりも  
 くと—ととあると女脚更衣のハ曹司ふさ  
 かつくはよの井ふまうしりきふけ更衣  
 脚寵愛のあまらねしうすあまのちこと

ら官仕のしとちり成ちさあ—とありぬ  
 ち—あつこのうまつくととろけんや父風  
 こい女脚更衣のらとろけ一義云け更衣父く  
 かわて後ハありたふりてあてうあ  
 まつらるとあるとさあ—福とらるさうふ  
 てせあり—んじとさ—とふれ水原抄  
 ちりあ—もとせはあふ

カリナシ

云破

三下ア

○まらりせす

三下ア

参進

或馳上

又参上

啓日臻

○春昇

平氏

の平向須登

恐坂尔幣奉



うの御為ふにりーやーくうつの子不使事と  
もあるとろろー世継よあると皮例と云えん人  
花山院はけも女御姫子兩院方のの継母中御会教忠女  
らふくてもろれ事ともあるとろろと信中御て  
世継ーみーあり

サカ十三  
不良 江淡

不祥サカ十三 不祥サカ十三 不祥サカ十三 不祥サカ十三

後涼友 婚流といふのやーとあつた  
後成湯記同いらうてんとしりてんあつたの  
正字のーくうあハーとさきおや  
うなつり たいのなうてあとお房とねといぬ  
たり又中ま備うれあうとねらるとい馬涼友の二  
回とこれほ方まといらうりひの御存のさ  
二の二男成うくの御房といや

後醍醐天皇  
二の二男成うくの御房といや

皇子三歳着袴例 冷泉院 天曆四年七月ハナ 圓融院

一条院 天曆 親王時



御時旧哀しける年親王はゆきしゆりりよ

糸原小野好古

百敷よもせむしにけがれしとくあけみまのうらみ

ねらありめ 駿又鑑目 奥入 武揚目 削穴目

まをむねあらしめいさるしとらふん也

くつさねとあとの 内苑寮 細友 王後原友

たよとけしとわらさる せしういしる也

あよふいしる 言也

いとけしるるのゆふと橋のりよのゆふぬきしるる

あよふいしるのゆふぬきしるるのゆふぬきしるる

あよふいしるのゆふぬきしるるのゆふぬきしるる

たのありて 海流 史記 陸 徒果友のこ解也

あよふいと 弟あやうしるる或云うしるる

従うしるるのゆふぬきしるる

あよふいしるるのゆふぬきしるる

あよふいしるるのゆふぬきしるるのゆふぬきしるる

我耶のの邪まとうしるるのゆふぬきしるる

警車 警車

清寧天皇三年奉徳計難計八王青蓋車迎入

文中に明天皇女御友澤子

結他如母

依病退出之時被聽輦車卒逝之後其細言被  
贈三位之輦車右挽のたぐり門ありのち中  
重代出入のため中重の輦車ともいふ牛車ハ  
牛代よりおきてまや牛車と聽て上东门地々  
出入する也

賦貞今日輿輦 注曰輿行曰輿輓行曰輦  
崔豹曰黃帝与虫を戦於涿泮有五色之  
枝玉葉心帝上有花葩之像曰而作花蓋輦輦車  
周礼皇后玉輓輦車且輓有翼羽蓋鄭玄曰后后  
官中從容高也輓輪人輓以行 司馬法曰及后氏

謂輦車曰余車殷曰胡奴車周曰輓車又曰及后  
人若人而輦車殷十八人而輦車周十五人而輦車余  
雅徒脚而馬輦車者輓音 先沈及  
周礼戎車但輓鄭玄曰為輓輪人輓之說又  
車也後漢書曰輓車而去挽引也 卓茂傳

贈宮位事 大寔元年始之于時大相云正廣三伴  
御持宿祢也 女房贈位例在前  
いふ生 生 或説いふ  
りさりしそらあしきいふ海河にさる常成なり

とくう 文徳美深云 延暦十四年春最澄法師  
傳教之師

入唐以後延暦二年國僧法師依詔崇恩殿修五佛頂法

名胡僧也 得度

いとおろくして 寂之寂 専イ

いけくひのゆさうふりしと 更かニカラ

源氏三歳時遭母喪事 父君ち之三歳時母死

時年廿五

みふくてもとあらんせりしははらひしはらひし  
しあふまじりなきともまじりしはらひしはらひし

云服 陽假事

服言今日之服 陽生三月至七歳廿二月 信

服言二月服言七月服 一日義解云謂未成人ト死日

陽謂其五月以上服親之服之陽故云本服三月

崇之生三月至七歳廿二月下可有之

其於五月以上服親之服之陽故云彼下服

且有限限法曹至家抄 人生七歳以上之服之陽也

源氏三歳之遭母喪事 專服假ありをくくく

とくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくし

をくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

まじりしとくしとくしとくし

道とくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく



八雲抄云ありくとよこひる方への向ふをいふる

女御とふらせともありわらう

侍臣女御乃例ありと喜上右内之女立后の  
例よりふらせありん女御ともいふるあり  
猶右足代の中右まてい女御も多四位女位  
より近代の叙進之位後より女御宣下あり

右中納言女立后例

藤原高子

中納言の長良女  
湯成院母后

二條后

之慶元年二月三日

皇后女御子

敬右内之御時女

三條院后

贈皇后起子 法皇院入之南白女

又于時中納言

冷泉院女御

乙御女為女御例

女御藤原元善子

元善天皇女御  
中納言山内女

女御橘美我子

宇多院女御  
藤原廣相女

女御藤原和香子

醍醐天皇女御  
右左衛門女

女御藤原惟子

同女御  
藤原言根女

女御友原惟子

侍臣女為女御例

女御三任橋三井子

桓妻女御  
長門位下入麻女

女御藤原澤子

仁明女御  
紀伊守德継女

女御藤原皇子

園融院女御

瑠川内白鳥通女于時父之内房

女御贈皇后藤原超子

左京院女御在和元年正月七日有内女  
于時父は奥院内白藏人功

んせもろつふ

ソセ

平

平

論語

いさうよ時約りあそひのつらんせと人あつ

まげらう 人

あつてことわらふなりや

異

あつてことわらふなりや 人

はうりく 五

道

記

いふいふさん

いふいふさん 記

葉花物語云まうせ行て後何りもあがり

とゆふまはまふんをせ給ふ程は女御

おのこのおし

後ふいらて

異 後ふいらて 記

見ふまはる人 記

見ふまはる人 記

あこてし 記

こきてし 記

のりき 記

按

あさひの命婦とつりしと  
ゆきりの命婦とつりしと

大同三年七月廿一日衛門府併衛左府又以<sup>テ</sup>勅負

名号同左名勅負府者衛門府<sup>コケシ</sup>

見職多令<sup>ミカキモリ</sup>

職負令云の命婦臣曰謂婦人帝位上為内

命婦五位以上喜曰命婦之入後又職負令

曰喜命婦唯夫位次<sup>ニ</sup>取因礼曰命婦謂九

嬪世婦也御之命婦謂瑞太史之喜也<sup>キ</sup>也

あいの命婦ハ九衛門也命婦ハ五位女蔵人

六位也勅負蔵人とも婦人の五位以上と帝

ともとの命婦とりよ五位以上の者乃喜と外

命下女とも令文也漢家又大概乞よに

従命下女の嬪世婦ともとりよハ中御

ハ御する

礼記妻古記注曰世婦<sup>ヲ</sup>為命下婦<sup>ト</sup>御太史之妻

高外命婦毛詩注曰侯太史織統<sup>ヲ</sup>御之

曰子大常太史命婦成<sup>ス</sup>祭服<sup>ヲ</sup>士<sup>ハ</sup>朝服<sup>ヲ</sup>庶

士以下各<sup>ハ</sup>衣<sup>ス</sup>其<sup>ノ</sup>衣<sup>ヲ</sup>也<sup>ハ</sup>毛詩篇者<sup>ハ</sup>續日本記曰延曆

二年春正月戊子朔是日勅内親王及内

統地ハ

白會<sup>ハ</sup>延

ノ字下<sup>ニ</sup>冠上<sup>ニ</sup>覆

九傳<sup>ハ</sup>ハ  
衡沈<sup>ハ</sup>延  
ヨコナカキ  
冠<sup>ハ</sup>平

命婦服色有<sup>テ</sup>限不得<sup>ル</sup>僭<sup>ル</sup>差<sup>ル</sup>

分<sup>カ</sup>庭<sup>ニ</sup>皆<sup>シ</sup>命婦對<sup>ス</sup>院<sup>ニ</sup>而<sup>シ</sup>儲<sup>ル</sup>皇<sup>ノ</sup> 白氏文集

新東三條院也<sup>ル</sup>少<sup>シ</sup>不<sup>レ</sup>記<sup>ス</sup>リ<sup>ク</sup> 時國融院此

秘<sup>シ</sup>よ<sup>ク</sup>も<sup>シ</sup>不<sup>レ</sup>如<sup>ク</sup>多<sup>ク</sup>淺<sup>キ</sup>く<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>中<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ル</sup>氣<sup>ノ</sup>ぬ<sup>レ</sup>也

とふつり<sup>リ</sup> 心

東三條入道前<sup>ニ</sup>後<sup>ニ</sup>改<sup>メ</sup>去<sup>リ</sup>去<sup>リ</sup>

去<sup>リ</sup>去<sup>リ</sup>あ<sup>リ</sup>ま<sup>シ</sup>い<sup>ク</sup>こ<sup>ト</sup>ろ<sup>ノ</sup>世<sup>ノ</sup>世<sup>ノ</sup>い<sup>ク</sup>こ<sup>ト</sup>ろ<sup>ノ</sup>心<sup>ノ</sup>心<sup>ノ</sup>あ<sup>リ</sup>あ<sup>リ</sup>と<sup>シ</sup>て

申<sup>ス</sup>つ<sup>ク</sup>よ 暮月夜 夕附 日 二 日 年 紀

心<sup>ノ</sup>心<sup>ノ</sup>あ<sup>リ</sup>あ<sup>リ</sup>い<sup>ク</sup>こ<sup>ト</sup>ろ<sup>ノ</sup>心<sup>ノ</sup>心<sup>ノ</sup>あ<sup>リ</sup>あ<sup>リ</sup>と<sup>シ</sup>て

い<sup>ク</sup>こ<sup>ト</sup>ろ<sup>ノ</sup>心<sup>ノ</sup>心<sup>ノ</sup>あ<sup>リ</sup>あ<sup>リ</sup>と<sup>シ</sup>て 心

心<sup>ノ</sup>心<sup>ノ</sup>あ<sup>リ</sup>あ<sup>リ</sup>と<sup>シ</sup>て

礼記曰<sup>ク</sup>少<sup>シ</sup>而<sup>シ</sup>之<sup>レ</sup>父<sup>者</sup>謂<sup>フ</sup>之<sup>レ</sup>孤<sup>老</sup>而<sup>シ</sup>之<sup>レ</sup>子<sup>者</sup>謂<sup>フ</sup>之<sup>レ</sup>獨<sup>老</sup>而<sup>シ</sup>

之<sup>レ</sup>妻<sup>者</sup>謂<sup>フ</sup>之<sup>レ</sup>寡<sup>老</sup>而<sup>シ</sup>之<sup>レ</sup>男<sup>者</sup>謂<sup>フ</sup>之<sup>レ</sup>寡<sup>カ</sup>け<sup>レ</sup>四<sup>者</sup>

天<sup>ノ</sup>氏<sup>之</sup>之<sup>レ</sup>窮<sup>也</sup>

今<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>寡<sup>カ</sup>孤<sup>獨</sup> 注曰謂<sup>フ</sup>之<sup>レ</sup>年<sup>一</sup>以上而<sup>シ</sup>之<sup>レ</sup>妻<sup>者</sup>為<sup>ル</sup>

寡<sup>カ</sup>之<sup>レ</sup>中<sup>ニ</sup>以上而<sup>シ</sup>之<sup>レ</sup>父<sup>者</sup>為<sup>ル</sup>寡<sup>カ</sup>之<sup>レ</sup>中<sup>ニ</sup>以上而<sup>シ</sup>之<sup>レ</sup>子

為<sup>ル</sup>獨<sup>シ</sup>け<sup>レ</sup>更<sup>ニ</sup>夜<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>母<sup>係</sup>も<sup>シ</sup>其<sup>ノ</sup>年<sup>齡</sup>也

伊<sup>ノ</sup>物<sup>也</sup>信<sup>云</sup> い<sup>ク</sup>こ<sup>ト</sup>ろ<sup>ノ</sup>心<sup>ノ</sup>心<sup>ノ</sup>あ<sup>リ</sup>あ<sup>リ</sup>と<sup>シ</sup>て

あ<sup>リ</sup>あ<sup>リ</sup>と<sup>シ</sup>て い<sup>ク</sup>こ<sup>ト</sup>ろ<sup>ノ</sup>心<sup>ノ</sup>心<sup>ノ</sup>あ<sup>リ</sup>あ<sup>リ</sup>と<sup>シ</sup>て

月<sup>ノ</sup>け<sup>レ</sup>り<sup>と</sup> い<sup>ク</sup>こ<sup>ト</sup>ろ<sup>ノ</sup>心<sup>ノ</sup>心<sup>ノ</sup>あ<sup>リ</sup>あ<sup>リ</sup>と<sup>シ</sup>て



拾遺

やん藤さげさる宿れまひりまよふ人をもみね秋にまきまき

具入

まよふもあれたるまよふまよふまよふまよふまよふまよふまよふ

たし

あまのいよきんもたをりてを藤よと問をりて

志きまら宿れまの時さひの秋まよとらとも是に

いぬとよ河と住とていれとらるまのちん

明

ちきつととらんよおとえいひをり竹を

とみももまきとてまかり魚のゆ也

浮瑠物流とまこつりよとまれ事とて

いみあはし

よもきれ家とけ入あよまつしと

拾遺

いそひる福まらる我宿れ人もまよふまよふ

きふきたすくまいたまよ一眉返耐双眼定

傷久ソコナキ毛モウ

まりのとけナゲ尚侍ナゲノサマ 典侍テンシ 掌侍テウシ

やいたららひくタマラヒ 技行テウギ 白父シロコ 同健ドウケン 日也ヒヤ

八雲抄云をハ漸ヤ也ヤ 較カマ 踰ユウ 的テキ 技行テウギ 同健ドウケン 日也ヒヤ

いそげきた人とイソゲキタヒト 雅切ヤクセツ

あちらうらたのいとほしくとねよなまらるは

菘子スウコ 白シロ イイ ナナ キキ ロロ キキ セセ ハハ  
吉キチ 可カ 者モノ 多タ 守モリ 守モリ

まののたもりんとてふまらる

いふかしてありとさうまう高砂武吉の格もいふとては  
も〜〜きいゆさういゆらん

百官の在代敷故小持中と百交とき或百城。

大和國所  
葛城武城  
上下部

文選金城百城とさり着け事九知と

高一入廣とまう築比の一貫とされと百ハり

つ〜もいふと申さういひり〜や〜いハ交れ

さや夏と粘と新よ〜も新ち〜

あて くらそめめいしち〜も思〜今ハ浪の〜と〜わり

申〜これカよ〜

俺も〜いひ申きたセタ〜も〜すれぬおま〜

いさ〜い〜い〜今〜い〜い〜と〜い〜つ〜

い〜た〜い〜も〜い〜通〜ら〜初〜也〜多〜い〜ま〜

い〜れ〜忘〜れ〜字〜

くれ〜ら〜よ〜れ〜を〜も〜さ〜し〜ら〜り〜

奥人 人の親のい〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜

都(は)み集(一)勇(諸)諸(膚) 信軍神之父ら〜も〜い〜

あ〜い〜い〜

西立西目〜頃目〜つ〜

12 思〜ら〜い〜ら〜り〜  
伊勢物〜

よ〜こ〜い〜ら〜ら〜ら〜  
経文ハ横死りり其中心ハ者横為毒果厭禱呪咽

之船中書とりり

茶師匠

由ぶるもいへばなまげ曲いろとくさくさくさくさく  
さめりい停い茶いさるい身業なりいさめ  
いふとさくさくさくさくさくさくさくさく

人さるくさくさく

頽

志ありいれらる 神事式泣とる極楽とさめ  
くさくさくさくさくさくさくさくさくさく

催白つや

一況云りいれさくさくさくさくさくさくさく

さふいさるいれあさくさくさくさくさくさく

あふ之けあ不耳ん令時い非曉使何可惜夜哉

尊深更候

夕月夜入さくさくさくさくさくさくさく

草のりさくさく ちあ河未動 夢入りい同風信

え

いさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

母後撰腹まて里にいゆさるい醍醐の山門よりさ常

れい又たさくさくさくさくさくさくさくさく

まうりさく

め月あふさくさくさくさくさくさくさくさく

かよときとえつるくまじ

くよとあつて其んらりくー是らるる也

信カミト言カミトの事カミト 言カミトの事カミト 言カミトの事カミト

持カミトらつらつきさる年カミト終カミトる我カミトとくカミトとカミトとカミトとカミト

下カミト細カミトる一とたもカミトとカミトとカミトとカミトとカミトとカミトとカミトとカミト

あまカミトからカミトあカミトをカミトあカミトうカミトとカミトとカミトとカミトとカミトとカミトとカミトとカミト

取カミトらみカミトとカミトとカミト 託カミト意カミト 在カミト仙カミト岩カミト 信カミト 天カミト集カミト

抑カミトえカミトらカミトらカミトくカミト一カミトとカミトとカミトとカミトとカミトとカミトとカミトとカミト

長カミト恨カミト奇カミト春カミト一カミト刺カミトとカミトあり 長カミト恨カミト奇カミト春カミト一カミト刺カミトとカミトあり

えカミトくカミト一カミトあカミトけカミトのカミトてカミトうカミトとカミトあり 調カミト度カミト

じカミトうカミト一カミトはカミト女カミトのカミトあカミトなカミト下カミト帝カミトにカミト髪カミトとカミトあカミトけカミトらカミトらカミトらカミト

しカミト仍カミト髪カミトあカミトけカミトれカミト羽カミトなカミトとカミトとカミトとカミトとカミトとカミトとカミトとカミト

狭カミト鈕カミトとカミトとカミトとカミトとカミトとカミトとカミトとカミト

天カミト白カミト皇カミト十カミト一カミト年カミト六カミト月カミト丁カミト卯カミト男カミト女カミト始カミト結カミト髪カミト

續カミト日本カミト記カミト回カミト大カミト齊カミト二カミト年カミト十カミト二カミト月カミトしカミト世カミト令カミト天カミト下カミト婦カミト女カミト

自カミト非カミト神カミト戸カミト母カミト交カミト宮カミト人カミト及カミト姫カミト宮カミト髪カミト

率カミト實カミト 和カミト名カミト 武カミト閑カミト

延カミト長カミト御カミト記カミト之カミト事カミト始カミト尔カミト毛カミト有カミト御カミト馬カミト木カミト好カミト于カミト御カミト殿カミト尔カミト

不カミト信カミト天カミト下カミト九カミト字カミト可カミト有カミト尔カミト即カミト天カミト下カミト奉カミト入カミト留カミト

影カミト謹カミト 和カミト名カミト

世帯もいふらうともみぢかき世帯の宿子ひかりそま  
らうらうらう 連物 しんくわ 奥入式法 日奉記

素衣鳥尊遊列せきく信地乃詔曰若ん信之 あしひ

むまのつみせんらのあきくろきけりらるる成けらん 旧書

らうらうめて 壺前裁 信濃東邊并内面邊 朝物年

枝裁前裁 延長元年 右衛門裁 草 架 ニヒラ

振申まくれせ給て秋西あけ前裁のなほとらふて

天曆御制表

秋風よりひくまはれあかりしきくみへん成まふとらん

長根なれぬまうり院のくせ給て伊勢者 ワラユキ 入りよめ

せあつらや しんくわ のら成

伊勢集云長根なれぬ乃屏風亭より院入り

まらせ給て前くのぬれよませ給らぬにぬ

門のぬれよ

紅葉もみぢなわらぬとらぬおかりし秋の海かりまわ

亭より院七条以南曲山給て東一可

らうらうめあとも 詩言志詩 永設 せ ら ら ら

と各列を他これ詩ともあとも こ ら そ ら そ

ゆらまの枕言し枕まらうとらぬ 奥入 し ら ら

と明なれのとらさとも 一 院 云 枕 子 中 朝 月 念 子

くろりくら 足寒時足寒時の乱乱 希範

あは人のとらうきつねのりくんとるくみん

<sup>奥入</sup>柏碧衣女取金釵鈿合各折其半授使者曰為

我謝右上皇謹獻是物君其好也 長恨 可侍

うひりまのりくともつてそもむれありん

ルカラハ方志 幻術士名玉城名魂正電

たえきよぬうひやうれやあらも

<sup>奥入</sup>在源芙蓉未央柳射如何後不長恨可謹

後成端名未央柳の一分成足せあらし

くろり是ハ新成日年本此極く

親約之古條院乃女樂小女三まと二月より

れあ成やきふもくり人の息と柳よく

いろ中一部の内ふもあめと念ろろ小細ろ

然るま芙蓉柳是又りまも深くたみり

て書あろろみせららみくろろ

あつらよくは

とこるくれ風あいさろろり

後一位初麻子多極本小はたなれ風りまいき

いろしわや武ないけ句る



天曆御集

言ふ世々の法はのらぬとておとせり多しとあるん

御返り

女御芳子 宣耀殿

秋はあふまぬとていふに我とていせらるることありん  
連理の仁も漢武帝元将元年に生じり吾もふ  
可勝斗

いとよきもらうとて

名押多

少子

彦

ととよしひ成りてはけりて

奥入

夕殿曇形思皆然

秋燈挑盡未飽賦

長根奇

右迎のつとされよのみやりのうきこゆり

まりのふふあり

奥入

突一魁乃近來おりの言人初奏時侍子初

右迎來宿申事至卯一刻内立亥一刻奏

宿経間

ふりたて

夜御殿

清涼殿

四方有書之南

大書戸一間に御帳曰清涼殿

東院 礼記白度時東有

書御方へ爰に御枕に二階あり神璽寶鏡と

葉せりふ

有覆

御帳四角に有燈檮檮地とく

秋火とくは神璽の御帳よりあり御帳に

南西少の書とく

見建曆四代 女官房に在り





みくし著と立らる陪膳其の著ととりて又  
立し著て打て出さし御時ハ也房鳴扇三番  
之時陪膳人撤之

陪膳蔵人乃以下四位侍臣役送四位五位六  
位随作有陪膳番膳より上首も役送等

申し上首ハ御陪膳も有之也又也房陪膳  
たがるとはもまけと存ありし。和 又由 枉

いとたいしとせんともあり退く 水原奥入  
け字不審子とくしとせんあいうえおれり子也

しるれ 事 論 然

<sup>キウ</sup>あふりさし我ハとつりあゆてるやもつれと然りしとん  
<sup>ホウ</sup>いさうりうたしとつりあまてるやひつれととけりん

人の御門のたしとまてしとつりさうりさうりさうり

<sup>サハナト</sup>私語 長根前尾池川 取言 万葉

揚貴妃とせと後玄宗位とけりしと也也  
もさうりやわたりしとまてしとんとあけとさ

多也

あらしとこれ去坊とつりしと

<sup>カミ</sup>神皇

天孫生而明達意確如矣年十有五立為皇也

子神代天皇十二年立神代名何年

為皇太子

よみけひくまき 兼川

ふいとまきらて 伊律字の世の人とて  
かのれをまきこの

むんとい祖母とて若くはまもいを存之 祖母

見子名 源重之母れあふこのさうあゆりよひ

にこれあつりるをゆかりていらく申とてえ

ふらひあそこのかりゆらとていひてゆれ

いむれ女のうんゆら

おれおとと思ふいひては我れはあはれぬ

まろよかりぬら一はうとらとせさるらぬま

いゝ 皇子七歳御書始例

村上天皇 祝王時 兼平二年二月廿二日

一條院 寛和二年十二月廿二日

とみぬあさうれをりともんてはそを志すれぬ也

天物部等在り部人 同第兵仗天降供奉

お郡氏乃遠祖天津麻呂神代名号と云

天孫天降時は前とてすうつ仍其子孫

子孫のお部と領して其方れ道と掌とてり

其後方者とはよのよと云ぬと云

歌 仇 怨

古より序たされぬのよれんとしうらむるふりや

を酒めりし

寂 娟 イヒナガ 伊勢の浪とて云

人生 日知記

秋のふもふりたそらぬ花あけりし 花とて時

とるれきしとやこれ神よと云井とてし

筆 コトサテ 淵 コトサテ 卷類篇云 碩耕反 形似及而短有十三 和名

風俗通曰本秦聲也 或曰蒙拓送

横笛律書樂圖云音歌 和名 本 イヒナガ 也 漢張騫

使西域者傳一曲

風俗通曰武帝時丘仲可送或黃帝時伶倫造

之雲井とひくすの ニツスル 徹天の樂れん也

こまうと 高砂麻人

天皇九年高砂麻王

遣使朝貢

と乃らうらふりてし ニツスル 字多のこまれはし

めあれい

寛平遺誠曰外蕃之人必可取見者在為甲

見之不可 イヒナガ 對年 李環 イヒナガ 朕已失之慎之

葉之如遺誠者蕃客よ イヒナガ 對し イヒナガ 云

少成哉 イヒナガ 云 イヒナガ 中 イヒナガ 云 イヒナガ 事 イヒナガ 云

不 イヒナガ 誠 イヒナガ 死 イヒナガ 西 イヒナガ 月 イヒナガ 此 イヒナガ 詞 イヒナガ 本 イヒナガ 文 イヒナガ 遠 イヒナガ 近 イヒナガ 若 イヒナガ 又 イヒナガ 亦

小 イヒナガ 有 イヒナガ 別 イヒナガ 勅 イヒナガ 列 イヒナガ 在 イヒナガ 如 イヒナガ 何 イヒナガ 傳 イヒナガ 思 イヒナガ 之 イヒナガ け イヒナガ 矣 イヒナガ 指 イヒナガ 而 イヒナガ 說 イヒナガ 之 イヒナガ 人

さ故のハ輒不<sup>シ</sup>言<sup>ス</sup>云<sup>ク</sup>中<sup>ニ</sup>と<sup>ル</sup>又<sup>ハ</sup>人<sup>ノ</sup>法<sup>ハ</sup>合<sup>ス</sup>然<sup>レ</sup>作<sup>ル</sup>  
者<sup>ハ</sup>折<sup>ル</sup>簡<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>意<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>依<sup>テ</sup>文<sup>ヲ</sup>也

さうろく人ふつろく

職<sup>ノ</sup>真<sup>ニ</sup>今日<sup>ハ</sup>玄<sup>ノ</sup>番<sup>ノ</sup>寮<sup>ニ</sup>蕃<sup>ノ</sup>客<sup>ヲ</sup>祥<sup>ニ</sup>見<sup>ル</sup>燕<sup>ニ</sup>卿<sup>ノ</sup>食<sup>ヲ</sup>送<sup>リ</sup>送<sup>リ</sup>

及<sup>テ</sup>在京<sup>ノ</sup>刺<sup>ノ</sup>狄<sup>ノ</sup>監<sup>ノ</sup>當<sup>ノ</sup>館<sup>ノ</sup>舍<sup>ノ</sup>事<sup>ヲ</sup>  
謂<sup>ク</sup>鴻臚<sup>ノ</sup>館<sup>也</sup>

鴻臚館ハ玄番寮小<sup>リ</sup>仍<sup>レ</sup>寮<sup>ノ</sup>乃<sup>チ</sup>鴻臚卿

と号<sup>ス</sup>と玄ハ遠<sup>キ</sup>也蕃ハ藩<sup>シ</sup>と藩<sup>シ</sup>と藩<sup>シ</sup>り来<sup>リ</sup>朝

容<sup>カ</sup>小<sup>カ</sup>扱<sup>ス</sup>る<sup>ル</sup>不<sup>レ</sup>也<sup>也</sup>右<sup>ニ</sup>来<sup>ル</sup>お<sup>シ</sup>し<sup>テ</sup>可<sup>ク</sup>敷<sup>ク</sup>客<sup>ノ</sup>餼<sup>ヲ</sup>る<sup>ル</sup>詩<sup>ノ</sup>

多<sup>ク</sup>之<sup>ノ</sup>漢<sup>ノ</sup>朝<sup>ノ</sup>鴻臚寺人<sup>ノ</sup>以<sup>テ</sup>後<sup>也</sup>也<sup>也</sup>館<sup>ノ</sup>延<sup>ス</sup>曆<sup>ノ</sup>遷<sup>ス</sup>都

之<sup>ノ</sup>始<sup>ハ</sup>東西<sup>ノ</sup>大<sup>ノ</sup>宮<sup>ニ</sup>被<sup>テ</sup>置<sup>ク</sup>之<sup>レ</sup>而<sup>シ</sup>弘<sup>ノ</sup>仁<sup>ノ</sup>以<sup>テ</sup>東<sup>ニ</sup>鴻臚館<sup>ヲ</sup>

為<sup>シ</sup>東<sup>ノ</sup>寺<sup>ト</sup>賜<sup>テ</sup>弘<sup>ノ</sup>法<sup>ノ</sup>大<sup>ノ</sup>師<sup>ト</sup>  
不<sup>レ</sup>文<sup>ノ</sup>三<sup>ノ</sup>藏<sup>ノ</sup>鴻臚<sup>ノ</sup>口<sup>ノ</sup>大<sup>ノ</sup>興<sup>ノ</sup>善<sup>ノ</sup>寺<sup>ヲ</sup>立<sup>テ</sup>例<sup>ノ</sup>九<sup>ノ</sup>式<sup>ノ</sup>又<sup>ハ</sup>所<sup>ノ</sup>三<sup>ノ</sup>藏<sup>ノ</sup>再<sup>ハ</sup>来<sup>ル</sup>ト云<sup>フ</sup>有<sup>リ</sup>寄<sup>ル</sup>

以西<sup>ノ</sup>鴻臚館<sup>ヲ</sup>為<sup>シ</sup>西<sup>ノ</sup>寺<sup>ト</sup>賜<sup>テ</sup>後<sup>ノ</sup>因<sup>テ</sup>僧<sup>ノ</sup>都<sup>ト</sup>其<sup>ノ</sup>後

七<sup>ノ</sup>條<sup>ノ</sup>未<sup>レ</sup>薩<sup>ス</sup>鴻臚館<sup>ト</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>置<sup>ク</sup>三<sup>ノ</sup>韓<sup>ノ</sup>舍<sup>ノ</sup>於<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>

中<sup>ニ</sup>

漢書曰鴻臚寺周礼太行人中<sup>ノ</sup>大<sup>ノ</sup>史<sup>ノ</sup>掌<sup>ル</sup>大<sup>ノ</sup>賓

之<sup>ノ</sup>礼<sup>ヲ</sup>及<sup>テ</sup>大<sup>ノ</sup>客<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>及<sup>テ</sup>小<sup>ノ</sup>行<sup>ノ</sup>下<sup>カ</sup>大<sup>ノ</sup>史<sup>ノ</sup>掌<sup>ル</sup>邦<sup>ノ</sup>國<sup>ノ</sup>賓<sup>ノ</sup>客<sup>ノ</sup>之

礼<sup>ヲ</sup>籍<sup>シ</sup>以<sup>テ</sup>待<sup>テ</sup>册<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>使<sup>者</sup>至<sup>リ</sup>奏<sup>シ</sup>曰<sup>ク</sup>典<sup>ノ</sup>客<sup>ノ</sup>漢書曰<sup>ク</sup>官<sup>ノ</sup>表

曰<sup>ク</sup>典<sup>ノ</sup>客<sup>ノ</sup>秦<sup>ノ</sup>官<sup>ノ</sup>掌<sup>ル</sup>諸<sup>ノ</sup>侯<sup>ノ</sup>飯<sup>ノ</sup>誼<sup>ノ</sup>饗<sup>ノ</sup>事<sup>ヲ</sup>秋<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>二<sup>ノ</sup>千<sup>ノ</sup>石<sup>ノ</sup>景

帝<sup>ノ</sup>更<sup>テ</sup>名<sup>シ</sup>曰<sup>ク</sup>大<sup>ノ</sup>行<sup>ノ</sup>令<sup>ト</sup>成<sup>ノ</sup>帝<sup>ノ</sup>改<sup>テ</sup>曰<sup>ク</sup>大<sup>ノ</sup>鴻臚<sup>ト</sup>王<sup>ノ</sup>莽<sup>ノ</sup>改<sup>テ</sup>曰<sup>ク</sup>典

樂<sup>ノ</sup>胡<sup>ノ</sup>廣<sup>ノ</sup>漢<sup>ノ</sup>官<sup>ノ</sup>解<sup>ノ</sup>譜<sup>ノ</sup>曰<sup>ク</sup>鴻臚<sup>ノ</sup>鼓<sup>ノ</sup>臚<sup>ノ</sup>傳<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>傳<sup>ル</sup>鼓<sup>ノ</sup>年<sup>ヲ</sup>

贊導九賓カニスル

右大弁 元明天皇和洞六年十月辛巳加右大弁

官吏生名六人通前十六員ナリ

尚書者シヤウシヤウ仁權衡之職也上家シヤウ七皇シヤウ

ニナリ 松云官七員而各一人也 仁權衡之職也 上家七皇 故也 漢朝尚書郎親迎之官也 仍口含鸚舌香

年握蘭故云握蘭之職也

升て予々すつら 將

人仁とるきあまるといふきあまるといふ

三代實錄後元曰仁明天皇嘉祥二年渤海國入

觀大使王文雄望見天皇ヲ討親王ヲ討在諸親王

中祚起起イレ係謂ハク能親曰ハク子有至貴之相ハク是

天位ハク必矣ハク

史記曰ハク宰相賢者ハク魯人ハク以讀書術ハク為ハク吏至大

鴻臚有相ハク之ハク當至ハク兼相有男四人使相之ハク至

第ハク二子其名其成相ハク曰ハク子貴當ハク射ハク後ハク

又曰ハク老父相ハク曰ハク后曰ハク夫人天下貴人令相ハク女子見

見ハク孝惠曰ハク夫人所以貴者ハク計男相ハク魯元亦皆貴大

鏡勅文曰ハク古老傳云ハク延喜御時異國相者ハク余ハク亦來

天皇御ハク下簾中ハク聞ハク其聲ハク云ハク此人為國主ハク歎ハク多

上抄下之聲ハク年也ハク時ハク聞ハク神ハク云ハク天皇ハク能ハク許ハク不出ハク御ハク次

先坊保明左大臣四年 右大臣蒙家列在依勅令相

回第一一人先坊 容息遇回第二一人四年 實盧過惠尼

回第三一人蒙家 容息過回名不叶以回不可

久欽貞信公為濟福公歸一遙離列惟如相者

遮申云彼後人少能心探容息叶回定テ久奉ニ

云欽者某之古賢活載叶注頗有疑貼保明

左子中名者延長三年誕生月四年二月十日立

左子中名同廿三年三月十日薨一十四所廟者昌素為四

年正月十八日遷左辛權叶新統者亦坊誕生

以前亦遠行也列在條願卷一看傳記之誤改

相者各亦條者亦事款

或記云西大臣在亦朱菴院西六町人西言ト云ク長行奉信奉云為ト云クト伴

列當子ト子ト子ト相人ト容息人トト云ク外

身リト云クト云クト云クト云クト云クト云ク

ト云クト云クト云クト云クト云クト云クト云ク

赴謫トト云クト云クト云ク

高砂麻人代視少也光原氏ト云クト云クト云ク

事始トト云クト云クト云クト云クト云クト云ク

西文和漢語同欽

ト云クト云クト云クト云クト云クト云クト云ク  
博士 女上日在子 或云云云云云云

此が少くも業々和洛強不危只少子の事也  
日教の事ともあり

博士天年二年始置文章博士

漢書曰明於古今温故知新謂之博士

聖徳太子習日教於高麗僧惠慈學和典

於博士見言並志定事天年二年始置文章博士

職負令日博之人掌教授定事詠定事生定事神

龜乙年七月廿日勅置律學博士二人 大回

三年二月四日習の事格置紀傳博士

兼和元年三月八日格置トナラフ記傳士加文章博士負

いとあふれりり分派はかりあつるとうさりあふり

とさすうて ナニカ感情り

やまとさう 和回相也

じりんの親王の加まりとれとせりたては

り 大漂り紀 ヤウ洋ト文ト選 大濠海演日

たりん 大凡ト俗り紀 直仁 は勢相流さあり

こまのり 礼記日報校以事上者 祝史 大文集

射師醫卜及百工日言伎謂いて七

とくさうれいたられんの久ませらふも

宿曜 大宿九曜の終慶とらてんれ運命と勢あり



源氏小ありし多てまわつてくわりしと云ふなり

弘仁五年五月八日遊下明詔男女都属此人物賜源

朝臣姓其各男皆用一字其爵世同叙後四位

弘仁源氏年集序 信 比色大長 弘 廣持大朝臣 常 東三條在長長四多子 寛 母世信氏

明 母日部多長 貞 母日部多長 源 母日部多長 全 母日部多長

源氏年集上云 漢源氏後弘仁寛平元年二月廿二日

初定七代源氏年爵以男 弘仁 兼和 天安 貞親 元慶 仁和 寛平 是し

弘仁源氏滿二年預爵權大納言兼右近

納大將民部卿中宮大夫菅原朝臣

宣奉勅天曆六年正月初加延嘉御後

代々源氏 左長即源氏

右長信 左長高 右長高 左長融 上弘仁

右長高 右長光 貞和 上兼和

右長能存 右長高 右長高 延和

以外貞親 元慶 仁和 寛平 源氏云云位仍不入之

日卒後記曰弘仁五年五月甲寅詔曰朕高揖讓

暴踐天位德悅眩迷化謝卑遠徒歲序屢

換男女稍衆未識子道違為人父辱累對

也空貫庫朕傷于摠思除親王之号賜

朝臣之姓編為同籍從事云身之初一叙六

位唯前号親王不可更改同母後産猶後一例  
其餘如可用者朕殊裁下史賢愚異智願  
育同息朕非忠終廢體餘分折枝葉  
因以天地推長皇王通興宜競度樂於一朝  
彫斲於万代著告内外令知計意し卯是  
曰之卿奏伏奉今月八日詔書備歲序屢  
換男女稍衆未識子道違為人父辱累封  
邑宜貴府庫恩除親王之号賜親臣之姓  
編為同籍後事於云去身之初一叙六位者  
階下則撰兼基之躬神國祀然循宗願彫斲

五初之唐  
本史  
上人金  
永代  
カハル日  
亦ハ天照  
ヨリ今  
三十一

降涂王号抑恩育長久新撰計天下未  
有臣等見之唯我國家聖緒一統初云云連  
君位之位自然名定若涂親王之号叙庶人之  
位託封也貴累枝葉之曹恐後世之有識  
前時不穩言聖擇不放不奏謹申  
因不許之

せんていの四れまひるらるれはへる

け先帝相當克孝天皇欽典侍同小と三代  
のまつくとあり克孝字多碓礪るる一孝欽  
醍醐帝世師和子後兼吉原為子内親王八仁和皇

女は例を

のめりてそまうて因書例見月

くきこえれ 九傳曰帝嫡妃曰皇后帝母曰皇

右后ま帝祖母曰左白皇太后

御せうよの若部卿まると 先とせうと

ひあひともいさうと定りやけきつふと

友意の正先

和漢ガレノ年ノマウ十葉タリヨリ楓サカテト

ちらつふ 形香舎 セシ建テ 友懸訓于本記上古北日本上建曆正記

うけりて 諾兼諾 受法え 事流ふけりり

うけりてんえ

こよあう 云け世具文 云哉用雅 こい出云と事と各別がえ

八七抄回らせくもれ海をくろきく子孫と

ふふとらふは便衣にもとり海成りいふ

まあやふりくもふふくまああしと

うふとくも回さや

はありまけこせぬを女孫子 不遠也

あやし 船迎

こころあはれれりしとらふとあうとこあふと

若葉 疏法記 駄かへ 白氏文集

さうとれりして 恒り記 云礼の務万葉 滑 亮子

伊勢の終云いとありと云々れと云々  
子とありす 云似や也あつらひくも  
人間に和とりきりきり父國下の  
愛増めやと果入

いふきよときころり 亭子院才の  
延表の年三月十日  
親王号の玉光交好色云双々養人

或部卿是忠親王 仁治後 始賜源姓号光源

中絶云源光 延表元年仁右左長目野

系圖といふおふ左長高の成光源氏と云

と云々日代と云々ときころりし 中絶親子

上東門院 乃下りせ行 仁治後

と世れ人申クれ 兼光和治

皇女入内也 昌子の親王 兼藤原女御

十二のてれせんわと云々 人生十二と一周と云

歳冠礼と云和漢例也 礼記曰天子之子生而冠

九傳曰歳皇十二歳一周天天之道大備故身夏殷

天子皆十二而冠春秋云羊傳襄公年十二而

冠之後八代記昂小曰天亦十二而冠則知天子

諸侯幼而即位者十二而冠矣

小昊顛頊夏殷帝王周文王魯魯襄公皆十二而

淮南志

六十ナカイニ美陽ノ石制ナシトシハマクヲカサニタメテナクハナリ

冠宋書志

天子諸侯進十二遠十五必冠

歲星上

歲孟周天

寬弘七年七月十七日甲午今上親王之服一書此十二

通大備

一備故國

長保五年二月廿日庚辰凡大臣男之服字法開白十二

君十二而

君而取

長保五年二月廿日庚辰凡大臣男之服字法開白十二

又而生

又而生

又而生

又而生

又而生

又而生

又而生

又而生

又而生

又而生

又而生

又而生

又而生

又而生

又而生

又而生

又而生

又而生

又而生

又而生

又而生

又而生

又而生

又而生

又而生

又而生

又而生

又而生

又而生

又而生

又而生

又而生

又而生

又而生

又而生

又而生

又而生

紫宸殿 謂之有殿以帳同清涼殿之帳

立御子小立賢座障子御帳間乃事作

子伯大又帳和南西母屋底南格子ハ多ハ被

下中見建曆日記 帳日記

内藏寮 教念院

たりのまゝと友のひんくはひりよ

清涼殿東底也建曆郷託タリ清涼殿之

間也小才一間母屋為シ路次御帳間御子

床子三脚才四間奥有厨子二脚有置也

以屏風石灰煙 弘麻板九枚北立三心御障子南平

長立小面障子字治細代布障子墨雲條也結イ

二間子上御座南昆明池障子小吹破野

小鷹得南切有鳴板見糸板向上被

立年中外事障子見建曆日記

いさゝの礼の古長の御さ 川入古長 加冠人者也

こけり申ひりり 監 録了

大蔵御蔵人つらまつり

雄略天皇之世始有大蔵官之号馬以ハ秦ハ公酒為

大蔵官頭ト一祝云大蔵ハ八理祭蔵人ハ伎道也

人各次又云理祭伎ハ蔵人乃而故障レ時

大蔵ハ勅心ク欽又云蔵人乃意大蔵ハ

欽蔵人乃大蔵ハ乃蔵人トもリ乃

代レ理祭蔵人乃例也  
又云大蔵御蔵人乃号元服ハ不役也勅欽

但親王元服大蔵有祿ト能事云先規欽然

而是ハ唯東云以元服儀元何也ク乃乃

乃小半ト乃云云此以元服南殿ク也

一ハ小半ト乃云云此以元服南殿ク也

### 大蔵省

周礼地官吏部之属欽本朝別置當省不計

矣朝之唯執者也以首第諸回祖統云事

乃成切下文今支配回者也

### 蔵人所

嵯峨天皇御宇弘仁年中始立之模具朝

カヌルニ

侍中内侍亦職欽彼侍中<sup>カ</sup>を為<sup>ニ</sup>重<sup>ニ</sup>任<sup>シ</sup>内侍者官  
者<sup>ト</sup>何<sup>レ</sup>也<sup>ナ</sup>本朝弘仁以<sup>テ</sup>既<sup>ニ</sup>サ<sup>レ</sup>細言及侍從為<sup>リ</sup>近習  
宣<sup>シ</sup>然<sup>ル</sup>職<sup>ニ</sup>而弘仁初<sup>ニ</sup>並<sup>ニ</sup>當<sup>ル</sup>而<sup>テ</sup>以<sup>テ</sup>公<sup>ト</sup>卿<sup>ト</sup>才<sup>一</sup>一<sup>ニ</sup>為<sup>リ</sup>列<sup>ス</sup>尚  
凡<sup>ク</sup>奈<sup>レ</sup>流<sup>ル</sup>例<sup>ト</sup>四位侍中中<sup>ニ</sup>擢<sup>テ</sup>其人<sup>ヲ</sup>為<sup>ス</sup>乃<sup>ト</sup>上<sup>ニ</sup>乃<sup>ト</sup>四位乃有<sup>ル</sup>例<sup>ト</sup>  
五位中<sup>ニ</sup>又<sup>ニ</sup>擢<sup>テ</sup>補<sup>ス</sup>之<sup>人</sup>六位中<sup>ニ</sup>擢<sup>テ</sup>補<sup>ス</sup>之<sup>人</sup>近<sup>ニ</sup>代<sup>ニ</sup>謂<sup>フ</sup>之<sup>人</sup>  
職<sup>事</sup>又<sup>ニ</sup>為<sup>ス</sup>要<sup>ニ</sup>籍<sup>ニ</sup>甄<sup>ニ</sup>任<sup>ス</sup>六位中<sup>ニ</sup>擢<sup>テ</sup>良<sup>ニ</sup>家<sup>ニ</sup>子<sup>ト</sup>令<sup>テ</sup>作<sup>ス</sup>  
殿<sup>ト</sup>謂<sup>フ</sup>之<sup>人</sup>非<sup>レ</sup>藏<sup>人</sup>  
きい<sup>ト</sup>雅<sup>ト</sup> 雅<sup>ト</sup>字<sup>ト</sup>記  
う<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>さ<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り 愛<sup>ス</sup>常<sup>ト</sup> <sup>ウ</sup>集<sup>ス</sup>  
あ<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup> 孝<sup>ニ</sup>德<sup>ニ</sup>天<sup>ニ</sup>皇<sup>ニ</sup>大<sup>ニ</sup>化<sup>ニ</sup>元<sup>ニ</sup>年<sup>ニ</sup>六<sup>ニ</sup>月<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>始<sup>ニ</sup>に<sup>テ</sup>奉<sup>ル</sup>下<sup>ル</sup> 土<sup>ノ</sup>端<sup>ト</sup>

見<sup>ル</sup>こ<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>い 素<sup>ト</sup>上<sup>ニ</sup>母<sup>ト</sup>相<sup>ト</sup>意<sup>ト</sup>帝<sup>ト</sup>姉<sup>ト</sup>妹<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>仍<sup>レ</sup>亦<sup>レ</sup>子<sup>ト</sup>腹<sup>ト</sup>  
と<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>に<sup>テ</sup>致<sup>ス</sup>は<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>中<sup>ニ</sup>將<sup>ト</sup>と<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>り  
う<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>君<sup>ト</sup>一<sup>ニ</sup>世<sup>ニ</sup>の<sup>レ</sup>源<sup>ト</sup>氏<sup>ト</sup>よ<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>見<sup>ル</sup>り  
そ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>サ<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>せ<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>致<sup>ス</sup>大<sup>ニ</sup>  
臣<sup>ト</sup>の<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>む<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>い  
あ<sup>レ</sup>じ<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>せ  
い<sup>レ</sup>そ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>終<sup>ス</sup>る  
御<sup>ト</sup>と<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>そ 時<sup>ト</sup>直<sup>ト</sup>う<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>夜<sup>ト</sup>の<sup>レ</sup>裏<sup>ト</sup>は<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>も  
い<sup>レ</sup>何<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>終<sup>ス</sup>て<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>ス<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>物<sup>ト</sup>徳<sup>ト</sup>よ  
も<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>あり

とらふ

横陳

信在少傍横陳

柱仙窟

延長十二年十月廿二日保明親王元服故丸

大臣時平 女系信謂副郎平 李部之記

寛和二年七月十八日之系 干時元服同日皇太子

子法興院大相國女尚侍字子為副郎見去後

元源氏通執政臣女事

丸系右大臣の女よりつりつり

西文丸大臣

年月の我がにきてのめきとふんれゆりすとある

とらふしよゆりして侍る上り親王元服時下

小能体一雨例也殿と云う間之神化門東之間西三

回也上戸有小部主上殿と云う後と云うは侍子懸梅

奏杖和琴の玉盤之脚圍基彈局筒 上代 未章

横火横 ヒウ 夏結 扱くふあると又横敷の前子 在視 春冬有

密幕小板敷乃西子有梅間小座 何筒 胎棚あ

了と近代横敷坤角 キウ 子丸大ミ 板小付 穂 芳 綴 石 今人

時蔵人引定二條院 何 以後 建曆

にりん 三 かりり り 酒 日

舊事 本 記 天原使時 曰干時 吾 田 康 葦 津 姫 下 定 田

号 後 名 田 以 其 田 稿 釀 天 酒 堂 年 之 矣





舊事本紀曰 出雲醜大臣命輕地回使多沙  
字為大臣奉齋大臣神其大臣始起計可也  
うくたわうの命婦 上礼義母うくたわうの命婦  
とるきたわうちきこり 白大樹一領

新王元服加冠祿白大臣御天皇元服祿衣一領也  
一統樹有大小著衣 上礼義母うくたわうの命婦

イトナキカタ 雅歌 イトナキカタ 雅歌 イトナキカタ 雅歌

いとしつる梁もつたれとゆひよられたは美多し 乃今  
君にた福やともしし 乃今 君にた福やともしし

拾遺(一) 依忠之御取被立祿之  
ゆひよられたは美多し 乃今 君にた福やともしし

男女れしゆひよられたは美多し 乃今 君にた福やともしし

八雲抄曰わせうらとひあせうらとひあせ 乃今 君にた福やともしし

撰よあすのうらとひあせ 乃今 君にた福やともしし

次小指今案先立小指次再拜次置器おた 乃今 君にた福やともしし

一統前中後指有  
正後宮也

いふれつこのれしりく人とと流のころとくも  
ゆりたまふ 九馬寮沙る 蔵人可ハ授書殿  
小也御鷹飼沙流力ハ蔵人可ハ取宿也常  
儀ハ親王元服ハ馬とハ川ハ不及若ハ柱喜  
之具者可ハ川之也新法式ハ見くくハ鷹飼  
有御幸卷

凡上右如付ハ御子馬鷹飼之事ハ臨時客ハ若ハ  
下可然ハ川出ハ必送之者也 或流云親王元服時  
賜鷹飼例ハ有西云記記ハ可動 上廻要抄云  
沙鷹飼ハ蔵人奉勅作檢非違使馬寮

赤い下下文作禁野

むすの所抄のりひのりものなり

獻物也奥ハ或物葉ハ

西云記云 本枝ハ葉也 葉とくハ薄根ハ  
志とくハ葉と入テ本枝ハ或ハハ付ナリハ下  
ハ之後ハ胎部ハ紗テ洞々ハ元服の時ハ  
のころハハハハ也

掌中曆曰 小葉 榊栲栗柳葉

ハ也食ハハハ

禄幸檀 内苑寮祓也 春云ハ元服ハ在之  
親王元服ハハハ之欽也 是ハ結梅ハ係ハ

七食事 延長七年二月十六日當代源氏二人

元胎密母屋簷代撤盡御座 其兩立倚

子為御座左孫座才二同有川入左右右座其

南才一間置圓座二枚為冠者座 置西又圓座前亦置圓座  
又其下置圓座其後

御先兩大臣被官着田座川入就還着幸座次冠

者二人立座退下於侍取改衣被敷之間由右左

祿於庭前拜席 不着 出仙華門退出於射場

着香撤祿次冠士二人入仙華門於庭中

拜席退出來和寺飯齋先是震儀御

侍一取倚子親王左右大臣下近侍等因儀有

盃酒御座由源氏儀計座 儀四位親王之次儀  
作(具)方儀也 儀更

大臣以下給祿由源氏宅名御宅食火具令分

諸陳所

天慶三年親王元胎月七食事門藏寮十具

穀舍院十具 以上檢校左政下  
作(具)之 衛門府五具 備作  
備作

寮五具 以上備作  
元朝 列立南殿版位東具東春興殿

西立幸橫十合伴等物有宣旨自長樂門

出入上心作并宣分給一取之史二人勾當其事

作檢非違使令分給守官三令改官二凡大近

之凡大兵衛二凡大衛門二藏人下二月記所一乘



于持丸大長母字多院皇女醍醐所字外位藏人  
等也

あくら 奥入 寺 又夕寺 昇就 木りくともふん也

万葉 秋の夜月もまにまに思ふに あくら くらき

木りくともふん 芳又碩くくく

いのかき い 津京舎 相無舎の殿乃次也

唐人の家も寝殿雅舎 い

大因乃あき い 仙家のふ唐小家 西王母家有 唐土三持

式又意中 い 依丸 虞摸韻云 壺臺 楚辭

相近年不見但忌癸之間 い 每逢有桐 建曆

さものい い ともりくく い

二條院事也 查修理 内近寮

い い 二

つけのい い ひろく い

栲鶴題鴉 鴉 栲鶴 抄云 栲中ヨリ唐中凡池乞七栲中凡池也唐 池の法風 白氏文集

胡 吉生石西粒衣短 物部 出池の小蓋味 好

ちりぬも い 彩 い とも い 人 い 池 い の い 人 い あり い け い

い 池 い 何 い 中 い ト い 云 い

河海抄巻第二

正六位上物語博士源惟良撰

第二 第本

巻名

ちきつじん<sup>てん</sup>成<sup>てん</sup>を<sup>てん</sup>ま<sup>てん</sup>は<sup>てん</sup>ふ<sup>てん</sup>あ<sup>てん</sup>の<sup>てん</sup>ほ<sup>てん</sup>い<sup>てん</sup>あ<sup>てん</sup>は  
ひろきん<sup>てん</sup>の<sup>てん</sup>あ<sup>てん</sup>い<sup>てん</sup>と<sup>てん</sup>き<sup>てん</sup>い<sup>てん</sup>き<sup>てん</sup>れ<sup>てん</sup>あ<sup>てん</sup>を  
う<sup>てん</sup>あ<sup>てん</sup>か<sup>てん</sup>う<sup>てん</sup>は<sup>てん</sup>あ<sup>てん</sup>う<sup>てん</sup>り

え源氏と名いふとくまき二格しと  
振舞ふつけていひるうとらたりと也  
名のこもくきとふまにるしていひるれ

流よつ下をいさるまじしきしひのぬるさなり  
よみつきくはちんたりの  
○後極少政所 築子 後一位

逸 日印乳 文士多 ス 教奇 サ 白文文集

人のめしひさくしよ  
あはれも何ふらん女帝をんれおらひきりきよ  
すめみ

鍛色 ニメタウ 托仙卷 又 鍛眉 同上 志立 こころ

るよひふにりきこといあて  
醜麻 くちま 名りふふりたやうなる也 あ 冥本 まへ 朱雀地と

明の野のわおふらりれはせん

一説云華平朝臣七夕はめふ巻とくると郷より  
町交野ふ一宿とめ有け名をいふ 又 葵明  
中おと号交野中おき又くはわわおと云  
古き物流りる好色りんとんをり一か詮  
枝もよれわおらあひもたれりおととく  
なれた色こおもなれゆり 芝原出ま然  
たちそふといふりてまひ心せんをん  
ろくも中説交野結はと云者ありとありと  
何もしるは伝用



とれよのうへにんれとうさしは

伊勢物語小葉年御位（たう）すうれくも世世たり

後そのよのうへにんれとうさしは

多河原なるたのふりしをりしをりし

と詠ふるは、元華子元文元年六月

廿八日卒ふ十六丁時九をたす也、寛平

七年八月廿五日薨（七十三）

乞おの同河く先達為流あり

うらめりしうらめりし

蘇 尔雅曰三日心曰蘇

うらめりしうらめりし 枕字ヲ漢字ニナス

物忘事 義津ニ蔵兼（フキヒラ）証譯 夫ハ迦也

衛國古世界名、胡其國中、一ハ枕林東西

可ハ所ヤ、中者枕木高丈ハ丈也、差

杖方ニ各可ハ丈也、其ト、平ハ（タカ）後西

有一大鬼王号曰物忘、一鬼王、迦他鬼神不

事也、小通鬼王（ヒサコシイ）疏、女里之即、致令、奏、向

於、少也、大鬼神、大鬼神、王、折、云、邪

云、危、生、中、若、有、病、若、疾、疫、之、難、若、念

云、危、生、中、若、有、病、若、疾、疫、之、難、若、念



天武天皇大同元年二月始置殿上并藏人以法還

左志舊後現野官位下勢大補藤原

冬嗣二人補之政執位是補苑人以例

忠仁云天武元年二月補苑人正月十日知位下

昭宣云天武元年七月治所欠親堂于二月十日知中

匡信云天武元年九月十日知中

福法云天武元年八月十日知中

忠義云天武元年三月十日知中

轉了知中 軋制知中 日武通事知中 禁制知中 知和名

長治天下知中 實親知中 惛治知中 復也知中

是悔弱知中 日本記曰成務天皇四年甲戌二月始定法國流

法芳每知中 有大人知中 非是大知中 志野之知中

名方知中 野色知中 詔曰自今以後四郡立長縣色置首而

苗回轉了知中 但四郡之首長乞ぬ中知中 延々知中 蕃

辱又云轉了知中 者回長也知中

侍勢相治云知中 中々知中 何れ知中 何れ知中 何れ知中

くす知中 と知中 多ふ知中 し知中 り知中 たり知中

昭恒似名序云知中 あ知中 何知中 の知中 た知中 さ知中 し知中 何知中 を知中

く知中 何知中 を知中 何知中 たり知中

思知中 冬知中 古知中 と知中 長知中 方知中 よ知中 り知中 何知中 たり知中 何知中



あんなに人の悪

うじりや

松かとううみへー 大悪 大都 厨子

二乃まら 次のもらとらふりり 大悪大都

んあて 八重抄云とらふりや

んあてふりる 氏七抄恒 名行らん物あめとたまとのまは白きく 躬恒

おこふい

足下秦始皇を死回足下騎邊臣曰秦雍

曰辟臣七店 ワリ お告言日教下洵下足下侍

志我事皆通勢 ケニノタクイ

あはれい志り 類 とけんけくまうき

あまのやとめまのやま とら せりま あ こと

うーアうん

あまこれ神うまのま い んれ衣冠 ま ーき

神まれま い んのうーま ふ 姿形 ま ーありく

根らとちり け まの具 あ とら ー ア う ん ら ー

ひくつ と とらと あ ら ら ー ー ぬ う ー

うりの い ー

あま い ー ま ー

あま い ー ま ー い ー ま ー

う い ー ま ー い ー ま ー

あうあうておいらにことごとくしめよのうらむら福ハ  
小大 オノオノ 葉の香也 キヨ 未城 スミヤカ 苗日 ナエヒ

楊家有女 物長成 オホトシナリ 在 マシテ 深窓 フカマド 人 ヒト 未識 スミシラ

かたかた 行切 イダク 日記 ニヒギ 行庭 イダテ

うらあやとれ 徳令序 トクノリ け字刻 ケジキ うらあやとれ ウラアヤトレ

とさし 夕夜 ユフヤ 夕夜 ユフヤ 夕夜 ユフヤ

あうあやとれ 中村 ナカムラ 中村 ナカムラ 中村 ナカムラ

あうあやとれ 下也 シモヤ 或玩 オクワン 腐丸 クワス 優 ユウ

あうあやとれ 中村 ナカムラ 中村 ナカムラ 中村 ナカムラ

あうあやとれ 中村 ナカムラ 中村 ナカムラ 中村 ナカムラ

あうあやとれ

あうあやとれ 中村 ナカムラ 中村 ナカムラ 中村 ナカムラ

あうあやとれ 中村 ナカムラ 中村 ナカムラ 中村 ナカムラ

あうあやとれ 中村 ナカムラ 中村 ナカムラ 中村 ナカムラ

あうあやとれ 中村 ナカムラ 中村 ナカムラ 中村 ナカムラ

あうあやとれ 中村 ナカムラ 中村 ナカムラ 中村 ナカムラ

あうあやとれ 中村 ナカムラ 中村 ナカムラ 中村 ナカムラ

あうあやとれ 中村 ナカムラ 中村 ナカムラ 中村 ナカムラ

あうあやとれ 中村 ナカムラ 中村 ナカムラ 中村 ナカムラ

あ

友原より守心

きらめ

ケモメ  
絳目

タマキ  
揚目

クモ  
刻

世ふらりきり

使

万葉

タウチ  
鶴寸日

うつらひ きりりや

うりたきのうりりいあぬ

不下羽

或不埒

フタエ  
或不下羽

江可の意直兩端

さしこれんきりり

ナニキ  
世若きうとち神と云ふこと

いさんきりり位

北条

前官

後位

この福根の種也

アサ  
海は形福うりりあぬはされうたふ

うらうらや

さしきりりや

やんのきつとをもちあつたふりたりたふと

い子針てんぬり

らあるとん

きりりや

将  
さしきりりや

ふすはひゆきりて

不<sup>ハシラ</sup>放<sup>ハシラ</sup>好<sup>ハシラ</sup>し まさるゝとらふに申されしと云神也

とれを〜さふ おだくまをりてみまはけりしなり  
うまのししにらきんひなりしに田田方

饗<sup>ニキヤカ</sup>贍<sup>カ</sup> 饗 和名 形<sup>カ</sup> 孫<sup>カ</sup> 手<sup>カ</sup> 紀 又富饒

あとのいんやうふんしとわがきりくこと

人といふこのあつぬ人れいんやうと

乃中ぬの源氏とまじりたりとまきよふらひ

いあり孫とみれこれとあらぬれぬるを

うらぬとらふ也

しりれ〜

ハきじり〜しりてのあれん

あよらうらう衣らうや〜らうらう

ゆらうら

大<sup>カ</sup>新<sup>カ</sup> 日中礼を聖姫のうの卵やとあをせとのきつ産路  
何文考考におんそののうら産路しては後〜けつと

又<sup>カ</sup>側<sup>カ</sup>新<sup>カ</sup> ホノカナルカケ

〜のいしたまけられまはらうらひき

上<sup>カ</sup>風<sup>カ</sup>化<sup>カ</sup>下<sup>カ</sup> 風刺正 福寿史記ホリ

上<sup>カ</sup>合<sup>カ</sup>淳<sup>カ</sup>徳<sup>カ</sup> 遇 下 懐忠信 事 史記

上<sup>カ</sup>之<sup>カ</sup>化<sup>カ</sup> 猶 風 麻 草

〜のいぬられらうら〜とまきり

適 毛



回成をさう人と思ひしは家成おさる家成ねと  
しる者いふるが成にとしるは也詩序ぬ以  
家之事懸一國事と云り凡傳云詩曰刑  
う寡寡をさう先才ニシテヤカトシ御一ウラナ家郡注曰詩  
大雅也言人の文王之教自近ナ及遠也寡方寡  
ハ嫡ニシテ妻謂大姫也文王は妻ありけりは子時先才  
振りてサカセ乞足ナラウヌ家郡ニシテナクナリ  
こまにいひしあふささうさうと  
たしうかましとすれはあつてうとせれあつてひととあふささう  
ハを抄云あふささうととさうもく下りてこ  
ものまらわりニシテ

あふささうなりと海をえぬ人あけしあふ

あふささうと云ふ也

あふささうり 言據言據と云ふは

あふささうり

うすみぬるえ 一説云うすくえ

あふささう 價おん云 二便ナシク せむ

あふささうと云ふはあふささうりをささうと云ふの意

あふささうりやと云ふは 古今長あ

あふささうりたしに方立らと云ふはあふささうりたしと云ふは

あふささうりたしと云ふはあふささうりたしと云ふは



一説古りさうらぬきんらふさよりきさうた  
さうらさうらさうら

あつしとまらふと さき

うさうさう 側 うさうさう さうら

くぬらたおしと 青ソカリテニイターリスナリ字義ハ不ク

曲 り 濃 然 河 間

たて 思てぬんれおしとに立伝つさうらう さうら

ゆらさうら き 倭人 り

論語に曰倭人に梓校結教の氏所堀也

又曰倭人多又曰倭人假に老と色行い

別類

ちび うさうさう たて 思てぬんれおしとに立伝つさうらう さうら

この物いふとらとさまおしとあまれ あま

てあまのこいさうら さうら

とさああら さうら

よせ さうら

あまの破 さうら

ゆ さうら

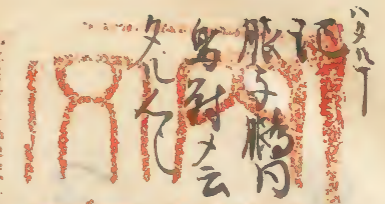
きん さうら

う さうら





お宿は臥のりや文造あり



は平若不繫く舟、疾子注入カ賈、恒服多、賦  
野多入宅、主人将、下、御同子服、予、ち、何  
達、い、ん、し、予、管、見、勅、得、之、  
意、熱、ゆ、く、自、電、  
是、ハ、善、成、ろ、之、言、集、也、

うかほく

點頭 式 欽狀 漢書 顔許 准あり 欽許 北はる

じ戸のそとおさこめろせよりてひらめり

お定博士い名目先例未勅均似合お合

判者同りの軽格 日見 京極小政所

自筆卒ちめらりとあるし死るも此心

一洗云格のうそ成かまう系時やこり

て羽成くくくくくくくくくくくくくくくく

井よりとあるをさあると曰也れ格乃晴姿

ヤニ輕格いろうくくくくくくくくくくく

本乃まらのきくくく 良近山削本 亭範

そらつききまれんみ 武流云方長長鼻眼之亦志とあり人ノヒラ

側付 寂 宿老 日

宿由 宿吉 宿日 葉くた礼た乃

依んぬれんふといふくくくくくくくくくく

に傳へり詔語多しと云れり云と云り云と云と

云れり云と云り云と云り云と云り云と云り云と

云れり云と云り云と云り云と云り云と云り云と

云れり云と云り云と云り云と云り云と云り云と

云れり云と云り云と云り云と云り云と云り云と

云れり云と云り云と云り云と云り云と云り云と

云れり云と云り云と云り云と云り云と云り云と

云れり云と云り云と云り云と云り云と云り云と

云れり云と云り云と云り云と云り云と云り云と

云れり云と云り云と云り云と云り云と云り云と

云れり云と云り云と云り云と云り云と云り云と

云れり云と云り云と云り云と云り云と云り云と

云れり云と云り云と云り云と云り云と云り云と

云れり云と云り云と云り云と云り云と云り云と

云れり云と云り云と云り云と云り云と云り云と

云れり云と云り云と云り云と云り云と云り云と

云れり云と云り云と云り云と云り云と云り云と

云れり云と云り云と云り云と云り云と云り云と

云れり云と云り云と云り云と云り云と云り云と

云れり云と云り云と云り云と云り云と云り云と

とくよららぬらしき一糸にひくせざるれ事

健 菅家後集

とくよらぬらよめや弦のすそをそらふを

とらきとらんや

んあつひんあつひん 船とららあつひんとき

けつ 吟者支頼 曉 烟 白氏文集

あきれたらあつひんたらくぬきつづつえのそえられ

あつひんあつひんあつひんあつひんあつひんあつひん

あつひん 親言

あつひんあつひんあつひんあつひんあつひんあつひん

あつひんあつひんあつひん

あつひんあつひんあつひんあつひんあつひんあつひん

あつひんあつひんあつひんあつひんあつひん

あつひんあつひんあつひんあつひんあつひんあつひん

あつひんあつひんあつひんあつひんあつひんあつひん

あつひんあつひん

あつひんあつひんあつひんあつひんあつひんあつひん

あつひんあつひんあつひんあつひんあつひんあつひん

あつひんあつひんあつひんあつひんあつひんあつひん

あつひんあつひんあつひんあつひんあつひんあつひん







侍の天

引をいそぐにいらして吉約のつる引をともひるとき  
けすのいんちつあひくハ瘡妬んじ和況アリ

たらしききりく

あはぬやんこをさしひたしきさくさくはな  
たつしねといふんはもつきならしたあふこのてふ  
とおとふまう

神田姫ハ深成事元 七夕ハ裁絶也

みふとに秋あもるう 神田姫ハ深成事元 七夕ハ裁絶也  
おまのいせまつあふおや

葉はまの依係山乃林より事たこるし

こりいれ家の前ふせくき清深ふ神

としい林々立田山の神 うち事ありて

紅葉浅深ふふなる 秋深深ふ神とし也

ふり神名也 神田姫乃奇 万葉

わらわ

わらわきいせういせう 神田姫ゆめは花浅深よりあは

秋乃さか姫ハふ見え

うはきく ふうりく

病のそしりきしぬふ

絶 光榮 夕葉 見 日記 光君の榮とらふ日記





あきれりき

籥 莫 籥

籥

籥

あきれりき田事也あれ又字ハさきとれ  
なり

あきれりき 盤 籥

風俗通曰秦声也或曰蒙恬所造也

声并凉列第形如瑟不知誰及或曰

秦多善第者故曰秦第釋名第施

弦高第第然或物云漢秦帝使素女

鼓五弦瑟之聲悲帝憐之乃破瑟為

二天相ト  
イ六界  
事ト也

十三弦今第也也首以竹造之其後

以相造之也

あきれりきあきれりきあきれりき

んとすうたりあきれりきあきれりき

あきれりきあきれりきあきれりき

あきれりきあきれりきあきれりき

あきれりき

あきれりきあきれりきあきれりき

あきれりきあきれりきあきれりき

アサヒチアトリタミウミト云候  
天照太神アサヒヒト云入朝日コトハカリミエマリ  
ヨキウサヒテカ天照神ノミミトハヒホノミナリ

まゝいかり

氣 日本記 形像

新橋御記

山崎のまはりあつともおしく小裏とけけよまき

山見 山崎 上親 山崎 旨 下 旨 下人 旨

互見 相奉

山崎のまはりあつともおしく小裏とけけよまき

ひの糸ふきあつともおしく小裏とけけよまき

ととあそく一はけいしとまきまららるるまき

とあちのらげとあ 牛 麦 万葉

まはりあつともおしく小裏とけけよまき

まらるるのまはりあつともおしく小裏とけけよまき

と我のまららるるをりや

我のまららるるをりや

まららるるをりや

鐘 おし 神 おし 故 おし 杉子 おし 歌 おし

まららるるをりや

まららるるをりや

まららるるをりや

まららるるをりや

信傳 信傳 新橋 新橋 流歌 流歌 日本記





八八八  
天下宮正声  
悦身昂為娛  
人間云正色  
八八八

悦目昂為媛

規色非相遠

貧富則有殊

貧為時不秀

富為時不秀

紅樓富家女

金縷繡羅襦

見之不飲干

婦麗二八物

母先未用口

已嫁不須史

緜窻貧家女

窳實二十餘

荊釵不直欵

夜上無志珠

幾迴人欲婿

條日又蜘蛛

主人會良媒

置酒滿玉壺

四在且勿飲

德我款而逢

富家女易嫁

嫁早輕其妾

貧家女難嫁

嫁晚孝於姑

同君欲娶婦

款娶之如何

直

實也

之ひやうもれありて移らのさうやくとくを

延在式日八十種草藥又口後草茶中蒜是

極其多業やみ食業法新業と云

新事ホ

松のふもれとそけいひわらう

載鬼一車何足畏棹至三峽未為元

雄丹

しつりたて

五子心テハ  
ムミ不用扱  
ムトナトモナロ  
カナンヤウニモ  
メルラ云アタナ  
ソメ面イ  
ロソヒラカスハ  
先母ナトニ漢  
衣モチワカセ  
ト云ヤウニ  
ハハシヤル

鬼一車易  
沈心ハ列  
アリ  
王ニカシタルハ  
ニチカリテ  
至テアソルハ

秦ノ中ノ樂天トソレハ時盛ス

春法

日

金

白平文集

停務おぼろぬまわりのさうとさうらそんれ  
らひとさうらじつげぎ事んれらあま  
らあよよのよやらん  
あこあうこそ 漢意 ちくちくこ  
まらやとあまらうのいりぬるん  
このとげのちうくさるくまんとおと  
ふしそいとをーまれ

論語曰

知者言未<sup>タ</sup>必<sup>ス</sup>書<sup>ス</sup>也

ツクサ

大年<sup>ハ</sup>納<sup>ト</sup>老<sup>ニ</sup>經<sup>ニ</sup>

大辯<sup>ハ</sup>辯<sup>ニ</sup> 辯<sup>ハ</sup>辯<sup>ニ</sup>

三史の經みりくくーさくさ

三史 史記漢書

六經 毛詩

礼記

九傳

停り三史の經 三史とて三史の經  
明經 明法とみり

お月のとらりいそれまらわーたあにわ  
わと思わらりれぬえちぬ秘成いさけ  
ふららのえんよまらごー乃らら法思ひ  
わらーあ

お日高

益谷園記日首楚人屈原字<sup>アハナ</sup>靈<sup>シ</sup>均<sup>ト</sup>為<sup>ス</sup>三

同大夫被終出而後以畔遂投汨羅水而

以死昂五月是也死也後有長沙人

歐回從岸屈原在其間謂回曰我今

受飢餓君面惠相濟否回曰何也原

曰要行爲盛食粽葉蜜頭不死昂以黃

葉裹之五色絲縛之投水索我我乃得

食也不死昂被蛟龍侵集人之索今

我皆不得食也回依言索之原須食不見

而謝之今人家之以爲午角糰乃蘆

葉裹未依作糰及艾葉糰并五色絲

繫之聖武天皇天乎十九年五月天皇

御南苑觀騎射走馬此日詔曰奇五月

節用萬蒲爲比糰此糰停此變後

今而後非萬蒲去勿入宮中九日五月

今重陽日菊有黃花天教九秋教九仍同重陽

續女踏記曰桓菜夜九月九日當大天

可盡家費長房曰登高採菜更採

頭折菊花浮酒將擡此灾桓菜暮夕歸

家門雞犬牛馬皆死長房問之曰汝宅

灾平城天皇四年九月九日幸神泉苑

兼命<sup>ナ</sup>文人<sup>ノ</sup>賤詩<sup>ヲ</sup>賜<sup>フ</sup>物有<sup>シ</sup>差<sup>シ</sup>  
寛平<sup>ノ</sup>透<sup>イ</sup>誠<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>五月<sup>ノ</sup>廿<sup>ニ</sup>日<sup>ノ</sup>九月<sup>ノ</sup>廿<sup>ニ</sup>日<sup>ノ</sup>文人<sup>ノ</sup>武<sup>ノ</sup>  
古<sup>ノ</sup>行<sup>ノ</sup>支<sup>ノ</sup>般<sup>ノ</sup>系<sup>ノ</sup>多<sup>ク</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>ク</sup>忘<sup>ス</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>ク</sup>緩<sup>ス</sup>  
之<sup>ノ</sup>乃<sup>レ</sup>考<sup>ス</sup>代<sup>ス</sup>  
菊<sup>ノ</sup>花<sup>ノ</sup>考<sup>ス</sup>と<sup>レ</sup>記<sup>ス</sup>て<sup>レ</sup>い<sup>ふ</sup>事<sup>ハ</sup>人<sup>ノ</sup>知<sup>ル</sup>事<sup>ナ</sup>神<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>い<sup>ふ</sup>事<sup>ナ</sup>  
君<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>い<sup>ふ</sup>事<sup>ハ</sup>の<sup>レ</sup>い<sup>ふ</sup>事<sup>ナ</sup>は<sup>レ</sup>い<sup>ふ</sup>事<sup>ナ</sup>は<sup>レ</sup>い<sup>ふ</sup>事<sup>ナ</sup>  
蕩<sup>ス</sup>意<sup>ス</sup>事<sup>ナ</sup>也<sup>ナ</sup>

多<sup>ク</sup>し<sup>テ</sup>み

中<sup>ノ</sup>神<sup>ノ</sup>也<sup>ナ</sup> 或<sup>レ</sup>長<sup>ク</sup>神<sup>ノ</sup>也<sup>ナ</sup> 五<sup>ノ</sup>説<sup>ニ</sup>見<sup>ル</sup> 夫<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>説<sup>ニ</sup>也 天<sup>ノ</sup>ノ<sup>レ</sup>神<sup>ノ</sup>也<sup>ナ</sup>

金<sup>ノ</sup>櫃<sup>ノ</sup>經<sup>テ</sup>曰<sup>ク</sup>天<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>立<sup>テ</sup>中<sup>ノ</sup>央<sup>ノ</sup>為<sup>シ</sup>十<sup>二</sup>將<sup>ト</sup>定<sup>ス</sup>云<sup>フ</sup>云<sup>フ</sup>云<sup>フ</sup>

立<sup>テ</sup>中<sup>ノ</sup>央<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>故<sup>ニ</sup>号<sup>ス</sup>中<sup>ノ</sup>神<sup>ノ</sup>也<sup>ナ</sup>

件<sup>ノ</sup>方<sup>ノ</sup>古<sup>ク</sup>今<sup>ク</sup>不<sup>レ</sup>遠<sup>ク</sup>来<sup>ル</sup>也<sup>ナ</sup> 見<sup>ル</sup>尚<sup>書</sup>曆<sup>陰</sup>陽<sup>詁</sup>書 安<sup>家</sup>説

或<sup>レ</sup>曰<sup>ク</sup>初<sup>ノ</sup>日<sup>ノ</sup>夜<sup>ノ</sup>有<sup>シ</sup>方<sup>ノ</sup>遠<sup>ク</sup>者<sup>ノ</sup>次<sup>ノ</sup>夜<sup>ノ</sup>可<sup>ク</sup>忘<sup>ス</sup>初<sup>ノ</sup>日<sup>ノ</sup>夜<sup>ノ</sup>也<sup>ナ</sup>

方<sup>ノ</sup>遠<sup>ク</sup>者<sup>ノ</sup>次<sup>ノ</sup>夜<sup>ノ</sup>有<sup>シ</sup>方<sup>ノ</sup>遠<sup>ク</sup>者<sup>ノ</sup>次<sup>ノ</sup>夜<sup>ノ</sup>可<sup>ク</sup>忘<sup>ス</sup>初<sup>ノ</sup>日<sup>ノ</sup>夜<sup>ノ</sup>也<sup>ナ</sup>

家<sup>ノ</sup>業<sup>ノ</sup>抄<sup>ニ</sup> 又<sup>レ</sup>永<sup>ク</sup>久<sup>ク</sup>四<sup>ノ</sup>年<sup>ノ</sup>十<sup>二</sup>月<sup>ノ</sup>二<sup>ノ</sup>日<sup>ノ</sup>維<sup>テ</sup>度<sup>ス</sup>凡<sup>ク</sup>

家<sup>ノ</sup>業<sup>ノ</sup>依<sup>テ</sup>法<sup>ニ</sup>性<sup>ノ</sup>寺<sup>ノ</sup>殿<sup>ノ</sup>命<sup>ト</sup>令<sup>テ</sup>注<sup>ス</sup>進<sup>ス</sup>

天<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>方<sup>ノ</sup>法<sup>ノ</sup>信<sup>ノ</sup>信<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>長<sup>ク</sup>神<sup>ノ</sup>也<sup>ナ</sup>

己<sup>ノ</sup>酉<sup>ノ</sup>日<sup>ノ</sup>在<sup>リ</sup>艮<sup>ノ</sup> 六<sup>ノ</sup>日<sup>ノ</sup>地<sup>ノ</sup>ノ 卯<sup>ノ</sup>日<sup>ノ</sup>在<sup>リ</sup>震<sup>ノ</sup>辰<sup>ノ</sup>卯<sup>ノ</sup>

五<sup>ノ</sup>日<sup>ノ</sup>雞<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup> 庚<sup>ノ</sup>申<sup>ノ</sup>日<sup>ノ</sup>在<sup>リ</sup>巽<sup>ノ</sup> 六<sup>ノ</sup>日<sup>ノ</sup>鳥<sup>ノ</sup>ノ 丙<sup>ノ</sup>寅<sup>ノ</sup>日<sup>ノ</sup>

在<sup>リ</sup>雞<sup>ノ</sup> 辛<sup>ノ</sup>未<sup>ノ</sup>日<sup>ノ</sup>在<sup>リ</sup>坤<sup>ノ</sup> 六<sup>ノ</sup>日<sup>ノ</sup>庚<sup>ノ</sup>ノ

丁丑日 在名<sup>三</sup>日 壬午日

在乳<sup>イ</sup> 六<sup>イ</sup>日 龍 戊子日 在坊子<sup>ナカ</sup> 六<sup>イ</sup>日 龜

自美已至戊申十六日 在天上佛

まゐ人<sup>ミヤノノタヒト</sup> 辰人<sup>ミヤノ</sup> 又志人<sup>ミヤノ</sup> 辰季<sup>ミヤノ</sup>

あふゆと

ありたりやなるしきりーあふとやらりー

なりたりーあふれのなりりー一辰

おとふせとやととれとそ二辰

風俗<sup>フウゾク</sup> 高<sup>タカ</sup>

二條院<sup>ニジョウイン</sup> 脱履<sup>ダツリン</sup> 碓<sup>ツツミ</sup>ハクワノウラニ物とをミルヤウ(アミタラノ)

陽成院と二条院と号と脱履と後<sup>ノチ</sup>は院

り二条以西<sup>ニジョウ</sup> 大炊<sup>オホクヒ</sup> 西門<sup>ニシカド</sup> 以南<sup>ノチ</sup> 他<sup>タ</sup> 少<sup>オホ</sup> 流<sup>リウ</sup> 以<sup>ヨリ</sup> 東<sup>トウ</sup>

西<sup>ニシ</sup> 洞<sup>ドウ</sup> 院<sup>イン</sup> 以<sup>ヨリ</sup> 西<sup>ニシ</sup> 也<sup>ナリ</sup> 京都<sup>キョウト</sup> の名<sup>ナ</sup> 流<sup>リウ</sup> とと<sup>ト</sup> 北<sup>キタ</sup> 接<sup>ツギ</sup> 子<sup>コ</sup>

きまもろり也

ありありのりあり 住<sup>ヰ</sup>

今<sup>イマ</sup> 京<sup>キョウ</sup> 極<sup>キョク</sup> 川<sup>カハ</sup> 也<sup>ナリ</sup> 見<sup>ミ</sup> 孝<sup>コウ</sup> ア 王<sup>オウ</sup> 記<sup>キ</sup> 兼<sup>ケン</sup> 花<sup>カ</sup> 和<sup>ワ</sup> 院<sup>イン</sup> 云<sup>クニ</sup>

中<sup>ナカ</sup> 川<sup>カハ</sup> 名<sup>ナ</sup> 也<sup>ナリ</sup> 御<sup>ミコ</sup> 堂<sup>ドウ</sup> 也<sup>ナリ</sup> 寺<sup>ジヤウ</sup> 流<sup>リウ</sup> 法<sup>ホウ</sup> 城<sup>シヤウ</sup> 与<sup>ヨリ</sup> 京<sup>キョウ</sup> 流<sup>リウ</sup> 也<sup>ナリ</sup>

志<sup>シ</sup> 記<sup>キ</sup> 云<sup>クニ</sup> 京<sup>キョウ</sup> 極<sup>キョク</sup> 川<sup>カハ</sup> 二<sup>ニ</sup> 条<sup>ジョウ</sup> 以<sup>ヨリ</sup> 西<sup>ニシ</sup> 号<sup>ナ</sup> 中<sup>ナカ</sup> 川<sup>カハ</sup> 云<sup>クニ</sup>

東<sup>トウ</sup> 川<sup>カハ</sup> 名<sup>ナ</sup> 也<sup>ナリ</sup> 西<sup>ニシ</sup> 川<sup>カハ</sup> 極<sup>キョク</sup> 川<sup>カハ</sup> 中<sup>ナカ</sup> 川<sup>カハ</sup> 京<sup>キョウ</sup> 極<sup>キョク</sup> 川<sup>カハ</sup>

ありーまいりのと流ふとあり 貴<sup>キ</sup> けあ



しらけりて 耳言 万葉

或るまは唯えりあさうか多てアつり給  
なせこれらも擗えとあすうと

赤流の事也

とろーどとゆりてうろと 万曲

くはろきく

ろくくくく交りうん中やうりあり

とハ極信の神也それ子對ては親也

明抄云 ありうりや

とがり恨といふぞハさるるれんもあて

いりさきあゆーきんよの給らふよ

んもむもぬるととーこまりてぬ

ら

和加伊戸波心波利悟於毛多礼

をむ新於交養ふ万世元巴尔世

元養心可奈尔奈尔子可元世波比

た多字加ふ介元世波比た多字

かふ介元

催るも石 我家

あてらうとて 嬖妍 万葉

二六あ孫君やまうよのむらのおる

まへに朝臣より改<sup>アラタケ</sup>まへに朝臣<sup>チカ</sup>

あふふく

石<sup>イシ</sup>意<sup>イ</sup> ナモリノカ 日 記 記 式<sup>シキ</sup>記<sup>キ</sup> 式 記 記

あふふく

あふふく

あふふく

あふふく

あふふく

あふふく

あふふく

あふふく

あふふく

あふふく

あふふく

あふふく

あふふく

あふふく

あふふく

あふふく



ほきくのくに次子降るまじしむかり

月次也

どうにもくく

二五動

うらたうま也

ろくよりとうは根よのらふうあらん

取上げ也

かりーくーきふり也

をーくーらぬつ 押立

うひ事 初事

あまのりきさるましまつ

漢 ありにらくこ 二週ア公

あまのりのらして

<sup>たて</sup>あまのりのらしてはあまのりきさるましまつ

あまのりきさるましまつはあまのりきさるましまつ

あまのりきさるましまつはあまのりきさるましまつ

やうそくもあれぬもの也

にかりれぬらん

あまのりきさるましまつ

あまのりきさるましまつはあまのりきさるましまつ

ららちるや

あまのりきさるましまつはあまのりきさるましまつ

みよとれをそ

それこそよきとて我宿成みよとれをそ人れすよ  
しりもとてく

数鳴 あまういひ

同章

事也 あまういひ

るこけりせたとみ

たし あまういひ

た星に恵いりけりぬ天河海を宮ととるわてよ

ううさあきく 西葉江云とけりあくら

世 たし

世れあきくしりきゆす

継母 同事也

請君掇蜂 トラニムトラ

君莫掇愛君 カ 父子成枝根 ハヤ久集

け和漢例多也

あて人とみ

妙人 高貴人

た 高貴人

た 高貴人

西隱



くらしくありてみまひみくぬ成る也

奥美砂川後拾遺云

ゆいそをわたりしゆりきりしとるるのどとては

今勅國史云 仁明天皇兼和二年六月勅

出雲東海東山並道河津く交武後亦教

少或橋梁不備中是 貞 洞擔夫未り集

河色一累日 經旬不得利 涉 宜每河

加増 後舟二艘 其價重者須正稅又

造浮橋令以通り及建布施屋備于橋

奇造作杉 齋用救息橋

湯成天皇元慶四年云弘仁二年國分寺左

法亮為教百姓河後之難於越後國古志郡

後所瀕建布施屋 施 壘田字余町 後

舟二艘令下注還之人 得之 橋 而年代

換久之 人 方河屋被換田 畠荒廢 屋 被

充越後國徑之人 永令 形 也

案 玉後 案 久之 也 原 久之 也 久之 也

了 其 久之 也 信乃 國 久之 也 久之 也

後 形 也

山 同 久之 也 也 也 也 也 也 也 也 也

波止りの原おとれ礪うの原のありやと申す由  
とや皆同おれ式流云信乃ふに宮成場と申  
れり此れと申すといふにうらむと申す  
り口成あをてそれよりなるものありを  
言のありにあり此新ありれ成るを屋  
と申すといふに 顯昭云信忠國其原  
を屋と云ふに 森ありりの本林よそふ  
高みくれの第本より似るは本れと  
志のあり成立ちよりてみまのち本とみま  
とありんり傳ふはちき本といふ庭と本  
らと本と家成つて後方の合略志 琴後判詞  
云昔風古記と申すゆら成見ゆりよとこみ  
第本れりい大略記ゆりきれと申すいさ  
りまらりゆりてるゆりいさにりゆり  
件本い妻流信乃あ四場と原ゆりや  
と云ふにありあもきくてみまのちとま  
本もゆりゆりありといふれとありぬ物ふ  
たとゆりと兼曆方合師 賢と申すきく  
の本と流やい流とあふりれみふとれと  
らといふゆりてきり一説云森本申す

くま本一りしありと云く經信の玩  
云けし可幸入權守伯耆本守不使事也  
書<sup>書</sup>改不使難不念而避而後取也  
可入寺系系集如何倚論抄云云  
き本一りの論ありし一りの第一本あり  
心森のあり也云々書いと三けくく枯乃  
中一りしと云くきくおころ也云々れ残也と  
くして心集にあるやう云く森れ下もゆさ  
く三れと本れ三けありと云くぬ也一冊の  
第一本あり似る本れその書あり也

云々云々云々てみるふいあるふ屋うて  
くくありてみまのうすりありとれいよく  
うり云いとおさま一ありとくあん抄也  
云々抄云けし守の心集りたるやう一伝乃  
圓ふと云ふ云々云々云々云々云々云々  
ありをよそおくみまの心集り本れ似  
心本れ指ふ見ゆらうとくありとくみまは  
うせとくみれとれたる本れ云々云々云々  
傳心集をこの法と云ふ人ありと云くハあり本れ  
みまと云うと云く云々云々云々云々云々

けはき第<sup>一</sup>とさるる本は凡てハハをくよ  
アアとくられりてアアは事式説ハ  
一第<sup>一</sup>本に知るる本あるとよそとく  
あると刃てとくよりてあるぬ本也  
より式又件第<sup>一</sup>本ある本と意乃  
原よりある物也とれと森叶り子  
うれが本れきけアアとくよとく  
みねる也け説とんを運用  
とく語り 云端  
さる事とあかせと

けはき第<sup>一</sup>とさるる本は凡てハハをくよ

アアとくられりてアアは事式説ハ

一第<sup>一</sup>本に知るる本あるとよそとく  
あると刃てとくよりてあるぬ本也  
より式又件第<sup>一</sup>本ある本と意乃  
原よりある物也とれと森叶り子  
うれが本れきけアアとくよとく  
みねる也け説とんを運用

とく語り 云端  
さる事とあかせと

けはき第<sup>一</sup>とさるる本は凡てハハをくよ

アアとくられりてアアは事式説ハ

一第<sup>一</sup>本に知るる本あるとよそとく

あると刃てとくよりてあるぬ本也

より式又件第<sup>一</sup>本ある本と意乃

原よりある物也とれと森叶り子

うれが本れきけアアとくよとく  
みねる也け説とんを運用

並一之蟬

卷名

ふ蟬が力強くくくろ本れ物に振る蟬つゝ三ふ  
ま並事

ふりれ物治り才二の並去日案み才あ  
つた並糸れ使事高なくくろるもあ  
函松乃物治と云物ふと並一帖あると乞  
亦例や凡げ物治乃並の指一偏り同時  
事とも凡くこと横置あるつ同つてまれ  
事津くくろるとみ物あ並ともりうれと

豊の並と云くくろやしにれを蟬れ巻こ  
まりのれい奥入あも二れさああれ  
と第一本れはもくくろのりあもあ  
一説あはくく日たまはれは並乃一第本  
ら並はニタふふとつたま玉髻乃並を  
横置お交まり未摘花実を並生ひ一向  
く横の並やうんれ物治乃あはひと横  
とみくくろ横松乃並と唐少日平よ  
事と同時ふあくくくは乞と横や  
凡くくひのちまは横れ後あはくく奥



入也程模乃茂と得在中院事云云尚書  
の爲れ立招けりい乃茂よお似とは  
序云以舜典合お竟曲益徳合お昇洵  
謨盤庚二篇合爲二庚王之諾合顧命也  
然其是今の並乃い多ういそり也並  
詩經逸方并配ナラフナラフの氣ナラフナラフの氣ナラフナラフ廣韻云并ハ  
合こみ詩賦序并序とるなり成書  
家説お序をあらせし心と讀くり余  
そりいり序と讀くそとて並の  
いり解お似るなり

本延  
ナラフ

概哉 棟哉 こ上目字記

たろいと 如針 式方便

女とら そりい若也一萬葉お思在とあると名の  
心也思とら回事や一萬葉一ノ月の名  
とありそれを風とそり一と云也

夕カレ屋カレもれとら多とら一き

夕カレ園カレるともし月約てふ似るせこりいといえ  
こころをせりよ

博物志云竟造園イ其石イ音朔字五作一云序造  
也晋中興書云園基竟常以教思イ子也



警め事也

しんも直

國直漢本

詔

詔

孝の所と程

國名結

入嗣

こうとまふ

人病

んるまき

こうとまふ

早建

初也

そりーくおさうーま

これらもの切と

切つひん

おろしいなりうそそ成るこみそうそと

くまうき

請君屈指教

白民文集

いよ乃申きことあといいーい海ーうみる

伊ふれゆれ抱きこいーけいこさるる

ふんらやふんらよまふやうらよる

ふん 雜藝 伊与陽

温泉記云後列温泉者其傍冠地於天下

其名著や人中美壘ト也ト山頭ト温泉ト

迄ト海口中ト底白砂ト潔ト口隅ト青岸斜朝

宗是幾許ト辞海ト二三里觀ト云温泉上

下通ト以別ト字ト以率ト貴賤ト不ト混ト流ト故也

上則ト據ト廊ト宇ト用ト戸ト牖ト其ト裏ト備ト屏ト是

居用之具ト下亦ト九山石右岸樹ト其間ト麩ト法

風湯日之氣ト也ト是ト来ト者ト云ト障ト法ト者ト有ト使ト以下

依繫  
略く

ふ列あ成三戸此後の棚中ふり湯水戸  
りりきこのころりせふみちをせん

風土記曰きこれ救あ百三十九瓦三素麻

りともうーをれふ海らて

目れと腫あう極也次洞ふ移ひきく

あき一統曰悟くこひこいたくたん

いず御也

うり進井きり

そり極きころこ

後成つぬ流りりるん也

あらつる

心あは漢々やつりーハよふちれそ

初しじくろ成しつるーともう

かいまかん

視其私屏リ恒回見万葉因伊勢物語

伊勢物語あ云うれこといとる満

あうせんく明くはみたりこみ

みくくろりと云うたれま

あら也

うこいちふそあつめとハ持也

こゝろ 枕

今度 日記のうらみけり此日記あり

ついで書く 御名指也

風吹とふいきてとふしあつくと書ふいし

心ときこふふふしとあん

君意の後のうらみの書ふとふしは新し

つらつら書ふ新しあつらふれいふあつらふ

つとつとあつらふとふし

梅花句のうらみの書ふとふし

葉とついで書く 御名指也

よりのあつらふとふし

けり指終まの句也

いとあつらふ 御名指也

表とついで書く 御名指也

日書れあつらふとふし

人とのあつらふとふし

事とあつらふとふし

あつらふとふし

きんれきいそとあつらふとふし

あつらふとふし

蜻蛉日記云々成しくとに年一してらくきせん  
らふと有りあましきことくあり侍り決り  
九

つらとくくくきん

皇同集云々此きぬ成りて御りくく之と

とて

逢正成りてとてそらけり候ふうふとくひ成り

とてくくくくくくく

木りし

侍者 ラモト 白氏文集 御許 祢松手記

後集 ヨシヤサノモト 集ハ成シ修也

大鏡云々ふしあれたりの物もあつとねと

とけのさくふくそあをきふとて

和泉或アウ童名成此許此と云きり

此れをつつ秘くありききふと

列 列列の巻  
あまのつらき

ら蜂のあはるくくきり事なり成りくはあつとて

る あまのつらき 文選 蟬 せみ 懐と云きり

皮のさくくくくくくくくくくくくくくくくくく

打 ケイゴ 聲と蜂ともなり蜂のあり ケイゴ 聲をもつり

似ふ心なり

後撰云

うららるる祇園鳴きと空のぼしうさきも我いよるふ  
人がふ志みく 式本 人がよ

人音

いさげのあしりつ かうれてや

らあしやせげのあしれぬき衣染りれるとくをうん  
果又 祇園山伊勢よあしれぬき衣染りれるとくをうん  
はれは後撰ふ伊勢おたせれしふさぬをた  
きくとりりつりとしてとあり

まことまろんともあれたしうれい

花より 又知人もあれた物成後きたあつを後つり

あさころふと あさころふたん

あさころふと あさころふたん

あさころふと あさころふたん

あさころふと あさころふたん

あさころふと あさころふたん

あさころふと あさころふたん

可愛 狂化局

娃

婿

同

あさころふと あさころふたん

けしや伊勢集ふあつしうけま





並二夕顔

巻名

三位中お女お夕顔花置崩送光源氏云  
寄云河海し享

六条河原のしりあひりきれしり

密 日記

六条河原

枯中女母  
寄河原

上り也

中将河原

貞信云女  
寄河原

乃小重明親王乃

少方ふりし例を承え女御母大信女

以下一回也

伊勢お治しり〜凡たわいさうち君しり也

りきりくも川の母と〜あま〜りり

家といしにきり〜く〜くす〜おひりり

大武のりれと ケこ〜りれ〜ト 推えり母之

乳母 贖負令 有鄰 毗奈耶曰名師子

胤其父以見授ハ乳母

文字集略曰

彌 及礼及赤作伴  
年色五成乳母

毛 乳人母也

唐式曰

皇子

皇孫乳母

初名女能度

史記傳云帝小時東武侯母掌行卷以

帝々壯時號之曰大乳母

卒嚴經  
口撞波羅  
蜜乃乳  
声羅波  
羅蜜乃  
乳母

日本記曰天孫取婦人為乳母湯母及之飯  
爵湯坐カミユアマミ矣イ凡レ法レ祚レ部レ備レ行レ以レ奉レ養レ正レ孝  
下レ時レ權レ用レ他レ婦レ以レ乳レ養レ皇レ子レ正レ孝レ此レ世  
取レ乳レ母レ養レ兒レ之レ緣レ也レ今レ云レ凡レ親レ王レ及レ子  
者レ皆レ給レ乳レ母レ謂レ若レ日レ親レ王レ不レ守レ子レ不レ立レ法レ限レ  
親レ王レ之レ子レ二人レ而レ養レ子レ年レ才レ三レ以上レ皆レ乳レ母  
身レ死レ不得レ更レ立レ替レカハルレ替レ  
古今集化者紀乳母  
又系レ之レ也

湯母乳母  
大江高保母

伊呂物志云しり〜むここみ系レ之レ也

これみり

竹取うつ不レ隠レ養レるレのレ右レ物レ志レふレいレかレり  
寔レ名レ成レわレるレをレありレけレ物レ志レふレいレかレり  
のレ下レりレうレさレれレこレうレれレらレうレきレよレとレれレこ  
ろレのレよレみレらレしレるレ子レをレけレつレこレまレけレり  
かレわレるレ有レ子レ細レをレ統レ中レ推レ克レ良レ清レハ  
揚レ名レ分レ中レ又レあレとレけレ名レあレるレとレ養レるレ也レ也レ  
のレ系レ右レ丞レ相レ記レ云レ天レ曆レ十レ二レ年レ二レ月レ廿レ日レ着  
南レ圃レ文レ苑レ新レ長レ中レ推レ克レ朝レ臣レ可レ為レ所

監之由<sup>レ</sup>モ河次才お遠<sup>ク</sup>け即寛弘<sup>弘</sup>以<sup>け</sup>

名字あまきこゝろ

藤原惟光 寛弘三年正月石名位多降格少同三年三月  
中務少輔

平惟光 正保五年正月大宰任在<sup>る</sup>格少光  
寛弘三年正月石名位多降格少尉  
同七年二月十日任石名位多監長初三年  
正月の猶蔵人 見権記

大蔵是光 寛弘元年十月七日任越前權大極<sup>大</sup>

葛井是光 寛弘二年二月廿日  
任因幡大目 今泉院<sup>院</sup>権

藤井是光 寛弘三年十月十日任美濃權大目<sup>大</sup>  
同任美濃權大目<sup>大</sup>在<sup>る</sup>格 當年<sup>年</sup>権

けい<sup>い</sup>と<sup>と</sup>三人志作<sup>志</sup>み<sup>み</sup>

入御<sup>入</sup>志<sup>志</sup>剛<sup>剛</sup>白<sup>白</sup>中<sup>中</sup>又 良清惟光申揚

名<sup>名</sup>分<sup>分</sup>と<sup>と</sup>

あ<sup>あ</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>海

路<sup>路</sup>伊<sup>伊</sup>路<sup>路</sup> 日<sup>日</sup>幸<sup>幸</sup>紀

大<sup>大</sup>路<sup>路</sup> 万<sup>万</sup>葉

け<sup>け</sup>と<sup>と</sup>えん 半<sup>半</sup>部

えん<sup>えん</sup>も<sup>も</sup>を<sup>を</sup>せ<sup>せ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>す

徳<sup>徳</sup>茶<sup>茶</sup> 昔<sup>昔</sup>の<sup>の</sup>内<sup>内</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>た<sup>た</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>え<sup>え</sup>ん<sup>ん</sup>り<sup>り</sup>表<sup>表</sup>化<sup>化</sup>の<sup>の</sup>も

い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>と<sup>と</sup>用<sup>用</sup>ん<sup>ん</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>え<sup>え</sup>ん<sup>ん</sup>り<sup>り</sup>表<sup>表</sup>化<sup>化</sup>の<sup>の</sup>も

の<sup>の</sup>も<sup>も</sup>え<sup>え</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>た<sup>た</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>え<sup>え</sup>ん<sup>ん</sup>り<sup>り</sup>表<sup>表</sup>化<sup>化</sup>の<sup>の</sup>も

あ<sup>あ</sup>え<sup>え</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>え<sup>え</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>た<sup>た</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>え<sup>え</sup>ん<sup>ん</sup>り<sup>り</sup>表<sup>表</sup>化<sup>化</sup>の<sup>の</sup>も

良<sup>良</sup>清<sup>清</sup>惟<sup>惟</sup>光<sup>光</sup>申<sup>申</sup>揚<sup>揚</sup>

あはれいさねもと子りとまき

かといととこのをうり

詠織戸 うとれ

いほくうしりて

世中いあうしりて我あひんりあうをそ宿とまき

きりりけうてると

いさんのむねをたては言葉をらん宿ふさわりを録

きりりけうてると

紫明抄云 公良三位流るゝて秘事

きりりけうてると 海ふさねえ 大嘗年會

志とみやととね也 海陣 左の筋よ

立く 裏書 初云いいのあかりいと切方をそ

流るれりゆひらきと

早晚糸平 宅用肩見君

強用笑に憂愁眉 上自共々集

救くふ君こもてりなれ柳乃肩はこそとる念

をらこころ

うら傷と遠さふあやと我うのそふあふさひはゆい

けしあは梅花也されともいさけのこことちり

つらきとやうハタウ知れ花より思ふさくら

まはつはちり

伊とくしん

聖徳太子甲斐丸馬約し金奈給て  
とくけりし給し一々秦川流一人伊馬乃  
早り付しつりつり言ふれ給力  
監録也

これとあつて

し面皮面也つれつりつりつりつり  
仙居つりつりつりつりつりつり

<sup>たて</sup>つれつりつりつりつりつりつり  
<sup>なげ</sup>つれつりつりつりつりつりつり

これとあつてつりつりつりつりつり

つれつりつりつりつりつりつり

つれつりつりつりつりつりつり

つれつりつりつりつりつりつり

つれつりつりつりつりつりつり

つれつりつりつりつりつりつり

つれつりつりつりつりつりつり

つれつりつりつりつりつりつり

つれつりつりつりつりつりつり

事案之を既波心よりくたふるさる  
也之紀勢之太壇ヲり幸和弁席り  
とらふらみーくたふるも可らぬ  
といとありあふさうねと云也  
し祓くーしぬ

不宗之説 宗ノ 彦勃云 一説之也

といすのまはる

正しき事あすみくゆらんふ友のむといすは枝ありと

まれあつやうとららふきぬらさー

一えらふ

あれもた道なりやアとらら也後観は結

ーしれあといつら色形形也移りみ

らーい心根なり一説云うれそら

なれい心形

まらきあふさふさうこーい

ーらき扇の名のうらー志さるはなり

後脚の女説こうすといま物よさこい

んや一説まらき扇のはりれまらあ

うたをたうーあひく

鑰

事えんさる

まは せんさる也



安惠

の倍奉  
天台たご分

慈覺大師才子

始神河内郡

かりしあつらひしとんたあれたとよりしあれた事也  
一説云しつしとられた也源氏太政のりれと  
う家よりかりしとましとるふ事いよる  
かりし事いよる

そゆたにししと

猶豫 なほ 万葉 よろ 心をさゆ也

いじよの三つしふうとせ

交戒也 糞生 二活

あくの三のりのみあも

の品 上品上品

しり

個體 ひと 日記 に 記 正長式 頑

かさねくさうりあはる

あさひつふよアつりて

てあましうらとくしあはる河のあれたまの

さよともあり

言成すみ臨終ふつらうさああるさあもつと  
つきしあひ

寢 ころにまんとし葉よつとぬ御也







ふをいそぐれとみあはうなほあはくふりたのたふ

花容せいふ 万葉

けあみまなかりてこそとくけふおあつさく  
しそ花成にるあもと又車よりに  
ふふとくしひふれと云ふとあふれ  
ふ右幸りしみふりしてこそあ利  
あれく見はるふとあふもちつれと  
それとみる事と云ふ

あまこく 瘦工う白會事恰切嘆也

ゆきらのまら ゆき前松明

月いふよりきふ

夕まれの雲よりきふもまたえみ孫もあつさ  
きふと孫や武人男やまらりてあふ

ケミ 万葉 異伊勢物語とあふそいふと云ふ

ケミ カリコト 異計 日幸記

あさきまれとこ

羽明歌 又 且用 容成 万葉

万葉 我とこおあ 羽明 のとく 礼 ころく 三 して 多 のあ ひ 成 意 ころく

あさく 三 の 三 な 三 なた 三 を 三 我 三 せ 三 ころ 三 お 三 ち 三 れ 三 容 三 成 三 ころ 三 ち 三 も 三

あさく 三 の 三 ち 三 も 三

をさうまに流のらうくは申うたよりそむいらうさう  
まのうもあよらうとつり

延式 襦袢袴之巻 田舎式

駕興下り襦袢 助又 兼花お招云女房

口みくうりうすうられさうかきとらうりゆ  
いつけらり

まをうらうとせや

人のかこそいとよくゆ

佳人。四季花

祓いそれと ころむらふや

年預人 日本 調子

あらあうらうこく

四季 燦

まをれそつり

まいこら

秋おとまりぬ人なりあぬはう

本間より残る月の影をいんはう 秋はまきり

人なりれからあふあふはうなりしとき 戸なりん

あめあふん ちんくま

すよえ 秋は

志んんそりれをりりあひらうううすおぐえ  
あさやうりいさやひらう

世乃つ祢りい志んんあれしんおらるる  
事や志をん色のおりりあひらう  
後うらるるい志苑あきぬりうす  
の裳なり志苑あきぬらう  
裏いぬあや

もれぬまきけらぬらるる花の伝はれ  
わららるるい

古今席云とものらるるい志のさゆい  
うらうらあはれあはれあはれあはれ

ありや 中庭 儀は中ぬしき  
やのあき通し

あはれ 橋の寺あや、あはれ 我の神あひらりい我意あはれ  
あはれあはれあはれ

うらほーそらあ

赤橋 和云は赤い足ツタイノるガケタレ橋  
カツラキリ橋ヨソノテ去タレ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
うらうらあはれあはれあはれあはれ

若橋あはれあはれあはれあはれあはれ

金峯山縁起云、役優婆塞、金峯山と  
葛城峯ト為行通於兩山、百集、詔、因、詔、祚、  
今、後、指、之、時、金峯大神、不、勝、况、力、而、  
且、作、始、之、葛、本、一、言、主、大神、又、且、始、作、  
中、於、行、者、云、自、秋、夜、同、作、  
山、と、祈、り、  
小舎人童 小舎人の童ノ想多  
細碎 日守記 白氏文集

やほきぬつ  
細碎 日守記  
白氏文集

禮禮 日守記 目

まあるれとあこ名いまぬ  
けん  
氣盛人 恒相人  
新様手記  
いせのりいん

将衣 短裳 四書  
日守記

中関白為少将之時、洛赤深之、先才女而  
息、後、彼、女、奉、  
日暮、南、面、卷

詠居然間也夜人、奇焉甚、今來彼殿也、女  
有悦心會名、午後夜、來、但曉夕、云、車  
馬声成、在、以、長、結、付、針、着、在、夜、神、朝、此  
結、而、於、南、庭、樹、上、也、後、又、無、來、是、鬼、魅、之  
不、為、見、古、人、不、載、是、事、皆、以、禳、中、國、自、如、也  
間、天、延、貞、元、天、永、以、而、寬、弘、以、性、終、三、十  
年、事、也、彼、ら、又、云、一、条、院、御、宇、存、生、延、延、稱  
旨、いかにノエト唯、延、長、時、代、志、跡、以、冬、卷、志、人、三、編  
明、神、と、傳、迹、と、日、百、龍、襲、命、也、たたりノエト 日本記  
ん、と、お、か、ま、れ、ぬ、の、神、事、也、と、う、う、と、う、れ

み、お、ろ、い、み、と、う、て、お、き、う、は、や、ま、と、や、う  
い、の、み、と、ま、り、う、り、て、い、う、き、う、み、は、終、縁  
う、い、ふ、い、ん、と、あ、れ、う、ふ、み、う、り、と、見  
れ、と、り、一、福、う、り、い、ま、り、う、く、と、ま、れ  
い、ま、り、う、り、う、り、と、み、ん、と、い、う、り、う、り、  
き、み、う、り、う、り、け、れ、あ、う、よ、あ、ん、木、と、う、り、  
事、あ、り、れ、な、ま、と、や、う、い、れ、み、と、ら、れ  
う、ら、う、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
ら、う、り、う、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
じ、衣、細、れ、と、う、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、

と見た神もちて忽ち一人此の事なり  
なりてそれ此の事なりと云く此の事  
らら見た我なりていすなりと云く  
きんと云てわが事成りて云く此の事  
の事なりと云くやれと云く此の事  
あまきまてしと云く急云と云く此の事  
陰面草花あがいらりて云く此の事  
の事成りてしと云く急云と云く此の事  
と人の事なりと云く此の事なりと云く  
と云く此の事なりと云く此の事なりと云く  
事ありしはよく事違傳しと云く此の事  
人なりと云く

おがやうふつと云く此の事なりと云く  
先代旧事本記曰大己貴神末天羽車大鸕  
而立女不見妻傳りて行か節後縣取  
女天陶祇女千治玉依姫為妻此來之時  
人此可志而密此來之間女為任身之時  
父母疑故曰誰人來耶女子答曰神人快  
來自屋上零人來坐者復却耳尔時父母  
忽歎家既續麻作綜以針釣絲神人短







ふとらふふこい へあふこころありあつたり

みづをらりし ふとらふこころありあつたり

みづをらりし 万葉集 山嶽

万葉集 万葉集 山嶽

ゆき高の金峯山に信少細えう花あふ云あり

身おろりたれとこれうけあふらん

定ころんくくふもあふあふく

津ふはらけ あふ 思ふつらう

おとこのあつり あふ 思ふつらう

ふいふりあつらう あふ 思ふつらう

あつらう あふ 思ふつらう

あつらう あふ 思ふつらう

額家 櫛首也 額所也

万葉集 あひあふとぬら成りふいをるれ あふ 思ふつらう

比祇布之巨額所可加良受毛

あつらう あふ 思ふつらう

力の命 あふ 思ふつらう

吾累御之危而圖大山之安為朝之

行而思傳世之切 蘇子曰人生一世若朝露之

託也相柔り其而幾何量不 あふ 思ふつらう

後漢書例傳

亦九五元傳

七十而致仕ス 礼法有明文 何乃負耒耜者イ

斯言也不 可憐八九十 凶落双膝昏

朝露貪利 夕陽憂子 徒集

有之為未 導神 也を ありしなり

七十ヨリ子孫ニテ白氏文

金剛剛 花王遇古 釋迦現在觀音當來彌

勒也弥 勒也世 乃時比よ 三く 身に 念成 行

りり 如し 神也 仍も 三け 精進工 弥勒と 行

也心 也心 弥勒ハ 天迦 の付添 とう けて一 生補

憂弃 とす 才十 感劫 のり 先り 下生

如て 成行 一く 三書 小法 と法 如し 行る 也

故り 當來 守神 とい 也

うと 世も 一く 三書 小法 と法 如し 行る 也

んと 世も 一く 三書 小法 と法 如し 行る 也

涅槃經云若有善男子善女人諸根完

具受三 歸依 是則名為 優婆塞又 曰

若受三 歸依 及一 戒是 名一 優婆塞塞

優婆塞ハ 依り 三歸 依入 也 比丘

比丘尼優婆塞ハ 依り 三歸 依入 也 比丘

と也

うらたの丸

うらたの丸をこまふし推しあふらんく  
長生殿のうらたの丸をこまふし推しあふらんく  
とむささたらんく

七月七日長生殿 後半無人 私語時

在天形山 在地形連理枝

みろくの世にあらはれ

照六十百千集 注 要集 行 要集 道 意 五十七俱

照六十百千集 注 要集 行 要集 道 意

弥勒下生 経の 將來久遠 切かけ回書

成佛と伝 り 經 文

あらきり ねらさる也

いさうふ月ふゆりあきあきと成

万葉 心のふいさうふ月あきあきと成

いさよひの月十六日の月れらるふ月

ありてそをゆめをさるとなりと成

すみねれあつたふあきハ十六日乃月と成

とさうふ タカハ 能同方花りしとさうふ

とハ山れ 端りしとさうふ月成云と成

但いさうふいしと成と成 ねはせ コト ねはせ

とさうふ

おのぬれ半うら河の細代細代本よこさうし信のり集ては  
おのぬれ我やゆんのいさういほ花の移るもさるる移り  
からこれ油のゆれこころいさういさういさういさうい  
あまうもなをいふんやと武祝云いさういさうい  
せよいさういさういさういさういさういさうい  
沈み未動か今此奇一も集りいさういさうい  
より海十有りいさういさういさういさうい  
く不意 詳記 平日 尔不意之間水原抄云  
よりあぬらんえと案く不意乃集いさうい  
あぬらんえいさういさういさういさうい  
いさうい

あふり此院

河原院也

又案よりいさういさういさういさういさうい  
之案場いさういさういさういさういさうい  
いさうい 倭記

皮院凡古長融云舊宮也又号之案院後亦  
之多院也然也延古御記云此曰久入古案  
院也院是故凡古長源融云長宮也古細云  
源和長年色不也院

あり 院は別當あり

御記云天曆七年因七月十八日合清小野

之盛<sup>エテ</sup>為院<sup>冷泉院</sup> 新事御依請之盛  
令補禎

とて

をいりい おとろききてると云親也つ流云經  
美えがと<sup>ト</sup>ふ<sup>ト</sup>お通字也蜻蛉日記  
とおとろ人といりてとあり  
とをいり 下家司 流ちえ

に身中とん

<sup>万葉</sup> 小倉宮中河のきとふともまよとてゆとる  
武云おにあらうといふ名も也 <sup>あは</sup>おにあらうといふあり

水原抄云みきの枝川のゆふ事ありれど  
平海の海おきなりいたけふとまき  
とてきりてとらふ事流れりやまると  
とるを是正流し

本立とてとまきとてふ事秋のたつ屋  
<sup>たて</sup> 里のまきとて人のゆりお宿りも庭も新也  
今らたうれとて <sup>曹司</sup>おにあらうとて

孝了王記天慶三年十二月七日己刻冷泉  
院別館のまき け印流院まきとて別館  
建るる屋也

別冊として大塚宮とこゝろに記し奉りて

小寝殿也

室よりとく

と氣味

ふ氣印

そよらふみ〜〜とふくそありきれ

縁

えわりとみ〜夕影乃と雲のまをうれ時のくろく

けし源氏とえありとみ〜うまのくろくあり

ありきりともえりもふ極り〜つぬれ念

ふ〜とふりやさふいあ〜んさたりん

ありふくれともみふと〜ひ〜き源氏

とみ〜きりともふやきれ神あり

とみ出〜と霧乃きやいふと〜りれそふ

〜ありらふつ〜じき〜さるふ残女れ

〜ありら〜とき〜りひ〜りき

とふひ〜くさのひと〜み〜い〜り〜り

ありきらとあふたらる也

松道係伊勢大進

〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

あふれこふれ

山人

白浪れよふらほふ世残とくぬあふれこふれい若とさふ

あいにふれらり

あま〜い〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら



くはくくわ

あはれは藻ゆきしせは我くと秘成とさうり成行

つとねくうらふ 集 日記

ういゆ 副外

そらといさめきて 横刀 日記

いせはらうらめし 山源

うらへんあふさむいせはらうらめし

あきとさうり

伊勢おは云暮と笠とよりあはれとさうり

あきとさうり

あきとさうり

秋芳ふとふあ事さうりさうり

いふとさうりとのとみろつ物成

病名のやとらうは死おれ一なりとさうり

いとおさ 憐

うらうら

殿上童 侍童 和ふのほのまはま

は女の若はとうけてあるとら成り

うらうら

あきとさうり

日記





車具置<sup>テ</sup>俛<sup>ル</sup>為<sup>ス</sup>所<sup>ニ</sup>在<sup>リ</sup>与<sup>テ</sup>伊<sup>ノ</sup>是<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>被<sup>ル</sup>行<sup>ハ</sup>房<sup>内</sup>内<sup>ニ</sup>御<sup>ス</sup>之<sup>ヲ</sup>  
間<sup>ニ</sup>用<sup>テ</sup>墜<sup>リ</sup>龍<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>方<sup>ニ</sup>有<sup>ル</sup>お<sup>ノ</sup>声<sup>ヲ</sup>法<sup>皇</sup>令<sup>ニ</sup>同<sup>ニ</sup>始<sup>メ</sup>射<sup>テ</sup>因<sup>テ</sup>  
融<sup>レ</sup>俊<sup>ク</sup>歎<sup>ク</sup>如<sup>ク</sup>伊<sup>ノ</sup>是<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>法<sup>皇</sup>皇<sup>ノ</sup>答<sup>フ</sup>曰<sup>ク</sup>汝<sup>ノ</sup>及<sup>キ</sup>レ<sup>ル</sup>時<sup>ニ</sup>  
の<sup>レ</sup>下<sup>ニ</sup>我<sup>レ</sup>乃<sup>チ</sup>天<sup>子</sup>何<sup>レ</sup>得<sup>ル</sup>言<sup>フ</sup>此<sup>レ</sup>法<sup>皇</sup>平<sup>早</sup>可<sup>レ</sup>退<sup>ク</sup>  
改<sup>メ</sup>志<sup>ヲ</sup>靈<sup>物</sup>抱<sup>キ</sup>伊<sup>ノ</sup>是<sup>レ</sup>所<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>勝<sup>リ</sup>事<sup>ヲ</sup>死<sup>前</sup>強<sup>ク</sup>亦<sup>レ</sup>  
皆<sup>レ</sup>復<sup>ス</sup>中<sup>門</sup>外<sup>以</sup>以<sup>テ</sup>声<sup>ヲ</sup>寄<sup>リ</sup>乃<sup>チ</sup>軍<sup>童</sup>童<sup>頭</sup>近<sup>侍</sup>  
念<sup>フ</sup>所<sup>ニ</sup>半<sup>召</sup>召<sup>テ</sup>件<sup>ニ</sup>牛<sup>童</sup>令<sup>言</sup>人<sup>ノ</sup>之<sup>ヲ</sup>卷<sup>寄</sup>以<sup>テ</sup>車<sup>令</sup>  
系<sup>ル</sup>以<sup>テ</sup>是<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>顔<sup>色</sup>之<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>ク</sup>起<sup>立</sup>扶<sup>ツ</sup>杖<sup>ヲ</sup>  
系<sup>テ</sup>還<sup>テ</sup>伊<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>後<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>降<sup>ル</sup>龍<sup>大</sup>法<sup>師</sup>念<sup>ハ</sup>加<sup>テ</sup>拍<sup>終</sup>  
獲<sup>生</sup>生<sup>ト</sup>法<sup>王</sup>依<sup>テ</sup>先<sup>世</sup>之<sup>ヲ</sup>行<sup>業</sup>乃<sup>チ</sup>日<sup>布</sup>之<sup>ヲ</sup>

帝<sup>ト</sup>之<sup>レ</sup>泡<sup>避</sup>變<sup>テ</sup>多<sup>ク</sup>位<sup>ヲ</sup>神<sup>祇</sup>奉<sup>テ</sup>与<sup>テ</sup>獲<sup>テ</sup>進<sup>退</sup>融<sup>レ</sup>  
靈<sup>ゴ</sup>之<sup>レ</sup>件<sup>ノ</sup>戸<sup>面</sup>有<sup>ル</sup>打<sup>物</sup>跡<sup>ヲ</sup> 白<sup>談</sup>

ありきみ 我<sup>レ</sup>若<sup>ク</sup>凡<sup>ニ</sup> 我<sup>レ</sup>子<sup>ト</sup>と<sup>シ</sup>あ<sup>コ</sup>と<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup>

まらひのものととくありして

人<sup>ノ</sup>のそ<sup>と</sup>ま<sup>り</sup>あ<sup>る</sup>魂<sup>ノ</sup>魄<sup>ノ</sup>の二<sup>種</sup>あり三<sup>種</sup>を<sup>レ</sup>  
因<sup>テ</sup>以<sup>テ</sup>り<sup>て</sup>家<sup>ノ</sup>魂<sup>也</sup>天<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>乃<sup>チ</sup>湯<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>法<sup>皇</sup>教<sup>ヲ</sup>と<sup>シ</sup>  
ま<sup>は</sup>遠<sup>く</sup>な<sup>り</sup>れ<sup>ば</sup>移<sup>ル</sup>く<sup>は</sup>滿<sup>生</sup>代<sup>ノ</sup>魂<sup>也</sup>七<sup>魂</sup>を<sup>レ</sup>  
死<sup>を</sup>悔<sup>ミ</sup>と<sup>シ</sup>志<sup>ヲ</sup>怨<sup>ハ</sup>神<sup>ノ</sup>の<sup>と</sup>一<sup>ニ</sup>あ<sup>ら</sup>す<sup>は</sup>  
行<sup>ハ</sup>了<sup>レ</sup>れ<sup>ば</sup>わ<sup>ら</sup>し<sup>小</sup>神<sup>通</sup>あり<sup>と</sup>乞<sup>フ</sup>と<sup>シ</sup>志<sup>ヲ</sup>お<sup>は</sup>は<sup>し</sup>め<sup>り</sup>  
と<sup>シ</sup>習<sup>フ</sup>十三<sup>年</sup>小<sup>卒</sup>有<sup>ル</sup>乃<sup>チ</sup>十<sup>三</sup>年<sup>也</sup>十<sup>三</sup>年

まての尻ふうひくく長くあやさし魂より  
魄と南家程ふあつーききせう成さうり  
もれあそりーくうろし却ラヒマカス 史記ナヒマカス 月

南殿のおいのあいにしれ井ととやうツルカスきん  
世継云い殿 貞信とてりまれゆ時ヒカイし  
とありしゆらすつふふ延長朱崔院のい  
おとよしそ侍せめ命旨うけぬうせぬ  
てとこあひ一陣のたさあふたつます  
乃小南殿れは懐うーれ程と成らうゆ  
乃小おれきとひーては劔れつと

とつうりきれいしあやーとてきくらせ  
始ふ毛いしーとたつあてれ仇あう  
刀たあめあうありー魁なりきりといと  
にそりーくおりーきれとあつーう  
根刃しーと念さしせぬくたあやけの  
物言うけぬくういあよあ人そあう  
あふあうゆうすいあーらあんとは  
刀とひきあまーたれう成とくせぬ  
るりきたいすといくうらあらてし  
とれまこあゆあうりき

ち後



うとあたるい  
ととさやう

酒經

君ふりもくうとまくと移成のそとあふむがと

ここの事ふい

急事丸

御多々

伊勢お徳云志るの斗

ふとこ乃事しとくく取又あるとおとらうとく

みふいあありと 老ぬまのあ

きりしぬふんし

く信とく 眷属 或支離

ふらふみ

目お元日 水祓 肉家女

肉家けい

義都彼 伊勢話さ 取生 祚也 髪白之

老嫗 祚也と云り

年少れ我思ふも白河のうらむしよとてぬよるお

一況年よりぬまの腰くゆりちくくゆり

てうれ勝さありいてうふ中い

ありしとこ三乃橋とくみそゆうこと

くやと云

かこい 俗ふとくくとさうふと云んがこり

うとしりあふとくくく

類聚四史云弘仁八年八月は之位橋

皇駕天子  
山崩御上云  
直死マールハ  
ス人官車皇  
駕下云朝  
監下位マキ  
カナルニクア  
フ

約位常子薨死延暦年中授從四位下宮  
車皇駕出家為尼大上天王敬重之叙位  
三位及下病篤遺言氣絶則以席  
裹葬莫須時日棺斂薨时年三十

三ノ子ミヤミ

十娘曰 鬼近來 患頼声 音不徹

頼咳病 咳嗽咳病

ミヤミハミヤミ

事此ミヤミミヤミ

葉之ミヤミミヤミ

いとしいみく

いとしいみく

毛詩 斯之 毛詩 斯之

いとしいみく

いとしいみく

いとしいみく

いとしいみく

山城國風土記云南鳥部里稱鳥部者  
祭云伊石具的餅化鳥部与居其所

鳥部



後述漢人言

高平山宮ふ始のりしをいふるありし我と云ふ

こたう 小堂

こ清多てぬ念佛

百歳身後抄云 出家家仏事次第サウ葬送ワウ

以前三言念仏心 切立、制限仏事勤之

仏經法書中 切立、何葬送あり教臨

何今日分し、可勤カサヌ家也

三言念仏得十五切法、中見聖教

〜〜のりやと、今夜二勤果り

諸寺初夜後抄、と海と〜をこる也

修習苦法、三令失時、初夜後抄、勿有廢

中夜誦經心、自消息遺教ヨウキ

きよみり

十年經云、不為オモテ非分、自容死シ誦持ホウ大悲神

光綴起云、清水寺者在山城國愛宕郡

八坂歸東山上、于平觀音靈驗之地、行

穀居士孤菴之跡也、寶龜十二年、初建立

草堂、厥刻本、延曆十七年七月二日、更

造、大仏殿、大同二年、又造、闍伽藍、法

号北觀音寺堂前之額、清水寺題、大

ノヒヨカリシハ、ミミセト云々、他亦、をいふなり

門之額延曆四年十月壬午始設

石限高峯 石限石曰 北限大道

石限尾橋 石限尾橋

石限尾橋 石限尾橋

大とく

大徳 皇紀 肅宗削天下名山置大徳七人

僧之官徳

波堤也

蓄水日波 音碑 礼記注

築土邊水田塘 音唐 亦謂之堤

音み字 亦作記

音み字 亦作記

音み字 亦作記

音み字 亦作記

音み字 亦作記

音み字 亦作記

音み字 亦作記

音み字 亦作記

音み字 亦作記

音み字 亦作記





てつりーすは

ふ里おさのうは萩の葉なるひことありや  
らうとふにふもあふふのふりきり  
早十九日之の結花堂にて

孝部之紀云天長八年正月十八日卯戌  
時室正女位下落原部長寛子卒  
四十二月八日高三七日おら散山東法華寺  
修御禱布施名香一畧僧施残  
予らしりり日記云これおとこの候つきさす

あくらの候と観の如く結花堂とく

之の之味堂少く七日のりさりり結花

三味堂在四親院西弘仁三年壬辰四月五日

結梅秋七月上旬去来之切ハシメテ南院移り

名海

延暦寺後題  
文全茶田考

いんさうらうせ

後無明之  
文意指士

らんらんけくらせ給 朝文 日記

清和天王貞観九年十月勅号院南邊  
建一院号延命院乃至 自創名朝文洞

多不裁正子

あつゝ教文を仕事をお例を

この経がていこうふとつれ乃道

ありて

史記四十九日すてい中みふりうん

二者古道編廻未定く回送佛遠經

建傳と云經文有

うふとてあつてこうけふあつて

ころきみ玉警の事や女子をともころきと

云事ころにん

ゆりーはり

あじや

帰而礼 二醮福 饒列送物也 云云

式所 系礼具也

ぬさ 後麻 口禱中そはる社神さむらぬり ぬさ と後人のをりあふたまきけり

菅茂 いきいぬさとぬあど高山ぬ樂師社まふ

黄帝四十余子ありし寂未乃子後乃社

をぬて敵亦る丁文申 遂梳於此道

く死ぬる時折云名為社梳りの客と

りりりーと名残梳子と名とては道

社社是之人此後小社時饒送ふと

け敷也 饒道乃取成ハ祖席と云け凡祖祚  
を世伝ふ人此祚とも号ス又此の祚とも  
いふ也

木ノキミハヒコノミノミキタカラクニ  
師降家ノミコノ時中ニ交アリト云ヒテ  
願成候ルニキミ

海ノミコノミキタカラクニ  
逢マシメカシコトノミキタカラクニ  
あまのつひの形かこもともあまのつひの形かこも  
蛸ノミキタカラクニ

あまのつひの形かこもともあまのつひの形かこも  
あまのつひの形かこもともあまのつひの形かこも  
又類上事ノミキタカラクニ

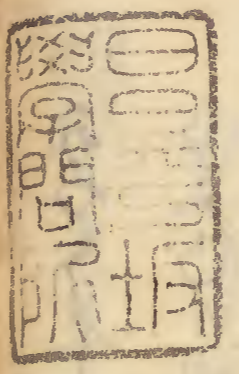
あまのつひの形かこもともあまのつひの形かこも  
あまのつひの形かこもともあまのつひの形かこも  
あまのつひの形かこもともあまのつひの形かこも

新妻如所集

あまのつひの形かこもともあまのつひの形かこも  
あまのつひの形かこもともあまのつひの形かこも  
あまのつひの形かこもともあまのつひの形かこも  
あまのつひの形かこもともあまのつひの形かこも

宮中書りへ付年

と乃りひさるゝ所は此と事ととるゝ  
とるゝと何句と人女高花人れおしひさるゝ  
とるゝ



149

枚



